

505

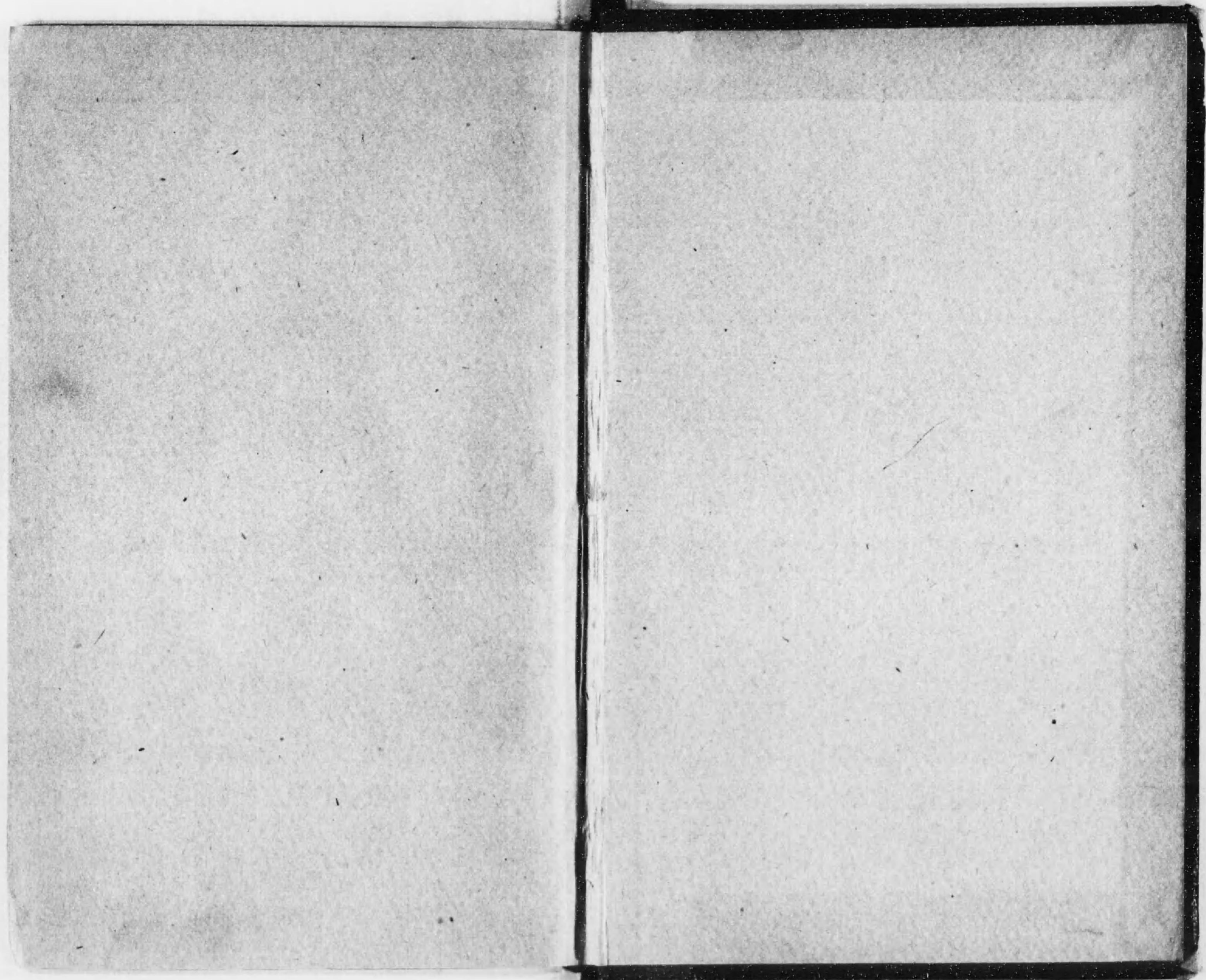
42



始









新選  
繪入

西鶴全集



505-42



新選  
繪入

西

鶴全集

驕樂篇  
第一卷

石川巖編

東京 從吾所好社版

編者寄贈本

大正  
11.5.15  
寄贈



### 西鶴全集の出版に就て

元祿の三大文豪のうち、芭蕉全集は最近沼波瓊音氏によつて一千餘頁の龐然たる大冊となつて世に現はれ、大近松を記念すべき大全集、これ亦旬日を待たず刊行されんとして居る、共に盛んなりと謂つべきである。然るに是等文豪中の一人井原西鶴は如何、その昔七年間師の舊廬を守つて、恩師思慕の誠を盡したといふ愛弟子北條團水は居た。翁逝いて二百三十年、平民文學の大立物として、江戸時代を通じて西鶴以前に西鶴なく、西鶴以後に西鶴なきは言はずもがな、國文學史上、特に明治の小説壇を開拓した功績に至つては、かの八文字舎本の開祖其碩自笑の徒輩が、翁の文脈を模倣せる以上有意義であつたことは争はれない事實である。翁の或種の作品に對しては今尙は禁遏され、剩學者の研究をすら拘束せしめつゝある不合理極まる現代に於て、その遺作の完全なものゝ出ないのも不思議はない筈である。従來西鶴の作品は屢種々なる名目によつて出版されて居ることは



言ふ迄もないが、名は全集であつても名實相伴はないのは勿論、校正及び編輯上の注意に至つては殆んど成つて居ないと言つてもいい、位のお粗末千萬なものばかりである。(但有朋堂文庫本は質に於て群を抜いて居る)此際従来發行された活字西鶴本の閱歷に就て一瞥を與へるのもあながち無用の言でもあるまいと思ふ。抑西鶴本の當局に睨まれる素因を造つたのは、明治二十三年十二月十五日に印刷して翌十六日出版となつてゐる、丸善書店と武藏屋叢書閣共同出版の「好色五人女」が振出して、次で翌年一月同書肆から「一代男」が後産も軽く、安々と生まれ、其翌二十四年二月、惜玉文庫第一巻として、古書保存會から、紅葉山人の校訂で「本朝若風俗」即ち男色大鑑が現はれ、同年四月には文學資料本の「好色一代女」が踵を次で出て居るが、何れも怪しい所は〇〇で填めた爲め共に禁止の厄は免れて居るが、以上は何れも好色本中の名代物ばかりであるのに無事で居たのは勿怪の幸とでも言はうか、それより三四年の後、例の洛陽の紙價を高からしめた博文館の西鶴全集上下二巻は明治二十七年の五月と六月に堂々と全國の肆店に捌れ、讀書

界を驚倒せしめたとは、西鶴も亦偉なる哉である。然るに發賣後約半年にして發賣禁止の嚴達が俄然として下つた。其事理を仄聞するに、餘りに賣行が良かったので、當局者が心配し出しての禁止だと傳へる者があつたが、或はさうかも知れない。禁止後三十年の今日、比較的本書の世間に弘まつて居るのはそれが證據でないとは言はれない。當局檢閲の無定見無方針はこればかりではない。あの爲永春水の「梅曆」の如き發賣後十數年にして禁止したのも其例に洩れない馬鹿々々しい事である。(だがこゝに斷つて置くが、春水の「梅曆」を禁止したのは當然な處置として敬意を表す)西鶴全集で味を占た博文館は、又しても前の全集を焼直し、更に〇〇を澤山にして、三十七八年頃「西鶴名著集」と化て矢張上下二巻を出したが、上巻は無事であつたが、下巻が出るや否や忽ち無殘の最期を遂げて仕舞つた。これ等は今から見ると殆んど兒戯に等しい徒ら事としか思へない位の無理な壓迫を出版者に加へたに過ぎないものである。これと相前後して春陽堂からは、露伴、紅葉の二大人の名で、西鶴文粹三巻が出て居るが、名の示す如く全く文粹



で、多く好色本中の差支なき部分を拔萃したもので、苦しまぎれの結果から思ひついたものであらう。その後明治四十年三四月に出版された平民書房の西鶴全集豫約出版が、大々の廣告の下に、半詐欺的手段で發賣されて居るが、それには好色本も〇〇なしの全文を入れるからとの宣言であつたに拘らず、とう／＼博文館本以上の劣悪本を掴ませられ、其上別冊とした「好色本」としてある分は愚にも付かない省略本でありながら、「好色」といふ書名が禍して是又焚書の刑に處せられたは寧ろ祝すべきであつた。何となれば同書房の全集と後に言はんとする向陵社の西鶴本に至つては、古書を覆刻するに、天下如斯不親切にして不真面目なる、而も校正の不正確、外見の不快なる、見るさへ頭痛を催して來る劣悪本である。それより四年目で例の袖珍文庫で出版成金となつた三教書院から「西鶴物」一輯に西鶴本としては餘り權威のない、俗つれ／＼、本朝櫻陰比事、萬の文反古の三篇が載つて居るが、形は小さいが、校正や編輯も可なり注意されて居るやうである一輯とあるから、續輯をも出す計畫であつたらうが、出さずに終つたのは惜い氣

がする。同書の卷頭言は西鶴の爲めに氣を吐く萬丈、而も吾人の意を得たものでもあり、且つ稀に見る名文であるから抜抄して置く、(文は沼波氏の筆であると聞いた)

「あゝ西鶴か」など、輕々しく友達見たいに西鶴を語る者は未だ西鶴を知り得ざる者である、西鶴を讀んで其文の妖艶のみを讚歎する輩はこれ亦眞に西鶴を知つた輩で無い。西鶴を目して亂俗の文を作す者としたる徒は昔もあつた今もある。この徒に至つて西鶴を解し得ざるに留まらず、文藝を知らず、人間を知らず、抑眞其者をも知らざる最哀れなる徒である。西鶴は過去の日本に於て最も完全に、最も美しく肉の人間を寫した大才である。寫す所は多く脂粉の氣霧の如く日月を籠むる世界である。百花の間に身を没し、其艶彩芳薫に酔うて死なんとする蛺蝶の情緒である。而して其處に一點の偽も無い。眞なるが爲に讀者はこれに對して極めて眞摯になる。幾多の道を見出し、幾多の教を得る。之をしも亂俗と言はゞ、源氏物語も亂俗であらう。否々、萬



業も古事記も亂俗と云はねばならぬ。眞を描いた文藝は人間界の寶である。その語を解し得る限りの人類これを読み、子孫をして讀ましめ、永遠に傳ふべきである。眞は悲哀である。かるが故に西鶴の舞文、五彩陸離たる文字の裏に、氷の如き一道の氣あつて、人の心を刺す西鶴を讀むことこれを反復せよ。必ず滂沱として涙の双頬に垂るゝ時があらう。是れこの氣に觸れたるの時なり。この氣に觸るゝ時眞に西鶴を解したるなり。文の妖艶は唯是れ衣裳である、皮膚である。眞に西鶴を解したる時、吾人は斯翁に對して甚深甚大なる敬度の念を動かし來る。日本に斯人ありしかと驚き、且つ歡喜する。

さて其の皮膚たり衣裳たる、彼が文章は頗る特色のあるもので、何人もこれに倣ふを容さぬものがある。西鶴は一面に俳諧師である。其の引締つた、文法を解脱した、内容に富んだ、印象的な文は確に俳諧から發展したものである。西鶴を讀むには西鶴獨特の表示法を飲込まぬと解り難い。これは讀み馴れゝば自らわかる、變な書き方だと感じて、直に西鶴の無學を思ひ。或は

文字の誤だと推測するは不可、再讀三讀すれば自ら其の然らざるべからざる所以を會得するであらう。西鶴の人間を寫し社會を寫す筆致は先づ感せられるが、彼が事を叙し來つて、卒然景を描き、描くと思ふ間に、知らぬ顔して事を叙し續く。この彼が描く背景の色彩の明るく鮮かなることを、決して見落してはならぬ。

以上は明治に於ける西鶴本出版の概略であるが、世は大正の御代となつて四年曩に一寸例に擧げた、田端向陵社から、赤門出身の文學士六人の大安賣で、平民書房流義の惡辣な廣告手段で、西鶴を賣物に「浮世草子」と銘打つて發賣したのが偶々讀書界の時好に叶ひ是又洛陽の紙價を高からしめたとの事であるが、餘りに陋劣な手段を回らした結果、好色本の部分は禁止されるに至つたのは當然の歸結であらう。西鶴本の惡本代表は平民書房本と此向陵社本とであるが、渠等をして斯る惡本を出さしめたのは、一面には爲政者も其責任を分たねばならぬ。即ち西鶴本とさへ言へば、何でも構はず風潰しにして仕舞つた觀があるのは遺憾である



是より先、大正の初年博文館より文藝叢書の西鶴文集、有朋堂文庫の西鶴文集二巻は共に西鶴本中の白眉であらう。

惟ふに西鶴本の禁止となつた原因の一つは、例の武藏屋本が詰らぬ遠慮をして〇〇を附して、當時讀書力の餘り進歩して居ない社會に、却つて淫猥的氣分を誘起せしむる種子を蒔いたのが抑々の過りで、あの當時寧ろ〇〇を入れずに置いたならば、或はそのまゝ無事に通過して居たかも知れないとは、舊文壇古老の言であるが、面白い咄である。斯く申す編者の如きも今より二十年前、博文館本の西鶴全集を購ひ求めたのは、元より翁の文章抔理解し得べくもなかつた、たゞ例の〇〇をのみ氣にして居た連中の一人であることを告白しない譯には行かない。若しもあの當時〇〇が附されて居なかつたら、西鶴の文抔見向も仕ないで済んだかも知れない。なまじひにそんな箇所があつたが爲めに餘計な想像が浮ぶ様になるのは人情の然らしむる所でないと言はれない。だがそれは二十年前の事でもあり一般讀書界の幼稚な時代でもあつたから、風教上害ありとして一部の禁止を行つ

たのも強ち無理とも申されまいが、大正も十年を経過した今日、生温い西鶴の好色本抔に目を呉れる様な青年は探しても見當らない程世界は違つて來て居る。

以上は從來出版され來たつた西鶴本の歴史的考察として擧げたに過ぎないのであるが、半生を江戸文藝中に没頭してゐる余に取りては、西鶴は平素忘れる事の出來ない懐しいものゝ一人であるは勿論、西鶴に關する記事の片言雙句といへども見遁さざらんと努めた關係上、此際翁を記念すべき全集出版の計畫を思ひ立ちしも、如何せん微力な編者と出版とを兼ての事故、他の二大文豪の如き立派なものが出来やう筈はありませんが、せめては自分の力相應なものを拵へて、世の同好者に預たうと心ざしたのが驕樂篇の第一巻「好色盛衰記」外二篇である。編輯の方針は大體左の形式に據る

## 一 驕樂篇

## 二 武家篇

## 三 町人篇

## 四 雜篇

## 五 俳諧篇

今は煩を厭ひ書目を列擧することは止めて置く。挿畫は全部入れる積りである



言ふ迄もなく西鶴本の面白味は半ばこの挿畫にあることを忘れてはならない。殊に風俗史の参考資料としては缺くべからざるものであるから。尙ほ斷つて置きたいののは、好色本中に屢出て來る極端なる鄙猥な厭ふべき文字は、避ける方針である。彼の從來の活字本にあるが如き何等差支なき箇所、例へば、博文館本で見える枕、床、などの文字をわざ／＼〇〇にするやうな兒戯に等しい削り方は遣らない方針である。

世界大戰後、無暗に外來思想をこれ尊しとする過渡期の日本、自國の文學を知らざること餘りにも甚しい現代にとつて、本書の刊行が、何等かの反省を促す機縁ともならば豈獨り編者の幸のみであらうか、此機會に於て、文豪を記念する年に當つて、翁の爲に忌はしき汚名を雪ぎ、全著作を解放し、圖書館に於ける閱覽禁止の惡令を撤廢し、學者の討究に便すべきを勸告して敢て當局者の反省を促したいと思ふ。殊に今日讀書界の一部には、性慾研究専門の雜誌さへ出て居る現代ではないか、それ等の雜誌に較べては、西鶴の好色本の如き足許にも及ばぬ生温

きものばかりであることを申添へて置きたい。

本書の印刷校了せんとする頃、朝日社が、近松翁の二百年記念祭を兼ね、藤井博士を拉し來つて翁の大全集を刊行せんと發表せり。時を同ふして、而も近松に造詣深き二大家が競つて翁の全集を出さるゝこと、江戸文藝並に近松宗の爲めに慶賀すべきであるのに引換、二百年後の今日も、依然として地獄巡りから浮ばれない吾西鶴は氣の毒なる哉。江戸文學に於ける革新的創始者としての偉勳は遙に近松の比ではない。然るに一は祝福に祝福を重ねられるに反し、一は侮辱され幽閉されて居る坏、世は利口者のお揃であることを擧げて筆を擱かう。

因に云、本全集の最後には、明治より大正の今日に至る諸家の研究記事の詳細目録と翁の著作年表を添へる積りである。本書の世に出るやうになつたのは偏に左の諸氏の賜であることを厚くお禮を申上げて置きたい。

横濱 渡邊和太郎氏

大阪 北田彦三郎氏

大阪 木谷 蓬吟氏

大阪府立圖書館



西鶴翁歿後二百三十年三月盡日

校訂者

石川

巖

新選西鶴全集 第一輯

目次

西鶴全集の出版に就て

◎好色盛衰記一名「西鶴榮花咄」……………一一〇〇

一 卷

- 一 松に懸るは二葉大臣……………三
- 二 是は房崎の新大臣……………六
- 三 久七生れながら俄大臣……………九
- 四 夢にも始末郎那大臣……………一三
- 五 夜の間の賣家化物大臣……………一七

二 卷

- 一 見の面影に入舞大臣……………二三

目次



目次

二 藤所金預け大臣……………二六  
 三 都を見ずに藻脱け大臣……………三〇  
 四 難波の冬は火桶大臣……………三三  
 五 仕合善し六藏大臣……………三七

三 卷

一 難波の梅や遊大臣……………四三  
 二 無分別の三大臣……………四七  
 三 反古と成る文宿大臣……………五〇  
 四 腹からの帥大臣……………五五  
 五 戀屋しのぐ紙衣大臣……………五八

四 卷

一 一生榮花大臣……………六三  
 二 煙に替る姿大臣……………六六  
 三 情に國を忘れ大臣……………七一

四 目前に裸大臣……………七四  
 五 菊紅葉鉢の木大臣……………七七

五 卷

一 後家にかゝつて仕合大臣……………八三  
 二 當流帥仕立の大臣……………八七  
 三 皆吹きあぐる風呂屋大臣……………九二  
 四 形にかまはぬ欲大臣……………九四  
 五 色に焼かれて煙大臣……………九七

附 録

椀久一世の物語……………五—三九

上 卷

一 夢中の怪……………五  
 二 人のほだしは女の敷銀……………七  
 目次……………三



目次

三 野郎宿は不破の關屋……………一〇

四 花車は引れてのほりつめ……………一三

五 時ならぬ敷の子……………一四

六 袖乞なれど義理の姿……………一六

七 世界は夜が盡……………二〇

下 卷

一 手桶も時の雨笠……………二五

二 情の錢五百……………二九

三 借着の袖はあはぬ昔……………三〇

四 現の情咄……………三三

五 小歌のぬうち……………三五

六 水は水で果つる身……………三七

新小夜嵐物語一名「梳久二世物語」……………四三―七九

上 卷

一 死所も多きに愛はさて……………四三

二 見の世の人に逢ひまして……………四七

三 又來る事のならぬ詠め……………五一

四 秤は情の掛そこなひ……………五三

五 銀にならざる笹の浮世……………五六

六 毛貫もあはぬ昔の顔付……………五八

下 卷

一 言葉の輕行紙貫大黒……………六五

二 頭は昔に變らぬ赤馬……………六七

三 碎けて物おもふ碓……………六八

四 車軸の離儀かゝる迷惑……………六九

五 聞かぬ顔は夜明の釣鐘……………七〇

六 此者は兩頭の亂れ髪……………七一

目次





好色盛衰記

目次

六

七	燒すらか思ひは袖香爐に留る	七二
八	約束のそら箱	七三
九	胸ひよく大鼓食次	七四
一〇	指は切目に鹽よりむこし	七五
一一	障子は明りを走る首柳	七六
一二	買掛りは絹袖の泪	七七
一三	本大臣成佛金銀の花の臺	七八

西鶴本を読む

一一一五

第一巻の後に





好色盛衰記

一名「西鶴榮花咄」

卷一

目録

一 松に懸るは二葉大臣

生れつきての女郎買は  
丹波口の大編笠着初め

二 是は房崎の新大臣

夜見る櫻程火が降る  
観音經は遊女の名寄

三 久七生れながら俄大臣

まだして見るは米買  
二百十日の戀風を待



四 夢にも始末邯鄲大臣

藥代はさぞよるまいぞ  
すゝはきの文反古何にか

五 夜の間の賣家化物大臣

きのふ迄は尼も見えず  
堺はねづよい所じやが

好色盛衰記 卷一

一 松にかゝるは二葉大臣

祇園悪所の銀遣ひ、諸わけ無情の男あり。澡座配の花代笑止、逼迫の小ばらひを  
顯す、これ盛んこれ衰へる二つ。女若むすこの好色鎧と名に立て、東川原西島原、兩方  
うち外さぬ遊興、奢りの大將、上京の邊りに住所を構へ、何の家業もなく、花麗  
歡樂に世を暮しぬ。此先祖何萬貫目か譲りける、十四歳より今五十三迄に二千七  
貫七百目色遊びに遣ひぬ。これ都の遊女町始つて前代例なほなき大臣と、世上に言へ  
る時花言葉も此人の事よりひろまれり。妻女は高家方より忍び縁組、年久しき契  
りなりしに、互ひの若盛りには仔細なくて、今老の身と成り、不思議の平産、而  
も男子なれば夫婦後喜の祝ひを重ね、六日誰に名づけ親を取りて千三郎と改め、  
乳母に抱き守の女房あまた付添ひ、日毎に成人して、既に忌明の宮参り、上御靈



の氏子にて御神前に女中駕籠つゞきて、御神樂あげて颯々の聲ゆたかに、舞姫鈴を載かせ、此若五百八十迄と口の中にて祝ひける。何れも嬉しさの三寸が上りて、此親仁機嫌のあまりに吾先に立ち、すぐに丹波口の噂宿に連れ行き、日比目かけぶりの亭主女房にひけらかしぬ。元より輕薄所なれば、まづは御目のうち、鼻の高さ、大臣に備はりました御生れ付とそだてける。是を聞き付、もろ／＼の末社伺候仕り、若大臣様の御越しは末々目出たし、それ／＼右のお手の動きやう、人にわつさりと物下さるゝはづみと、輕口申せば大笑ひして、乳母が袖口紅ゐのばつと小判花の都かはらす。かやうの事に遭ひまする始めと懐へ申し納めし時に、親仁の曰く、けふは替つた圖をもつて參ろ、伴千三郎大臣なり、恐らく忌明より女郎狂ひする事汝等聞き傳へし事も有や。いかな／＼神武此かた無い事なり、これ末世の咄しのたね、二葉大臣様と早くも替名を呼び奉り、太鼓の利發男が抱き參らせ、召したる浮世頭巾を取つて捨て、焼印の大編笠を着せ、此大臣に小便をしかけられたし、その着物を干所、裏の廣き家を買ふて貰ひますと勇みて、大勢

の女まじりに野道を行くに、大門の與右衛門袴肩衣にて、疱瘡遊ばさぬ守札御祝儀に差し上げゝる。五軒茶屋も暫く釜を鳴らさず、出口の茶屋は門々に打ち水、八文字屋の内儀御迎ひに、親仁の逢はるゝ太夫、唐土引舟一家の女郎三十八人、俄にさまざまの人形を調べ、揚屋町をさゝめき渡れば、折節花見月二十五日天神入亂れ、太夫残らず禿出て見よと言ふ時花歌に、三味線彈の女郎迄簾をあげて、見世は棧敷の如し。次手ながら眺め渡して其中を乳母が物好にして、新造の太夫を千三郎のお敵と品定めて引合せの盃事、一座に女郎十五人呼ばせて、召使の町女房ませこせに歌ひ騒ぎて、此事を奥様へ申しつかはしければ、御嬉しきとの御事にて、科員比丘尼の妙貞を遣はされ、随分大きに噪ぎて、その太夫に千三郎を振らせぬ様に仕ふまつれど、手枕と云名香を水風呂の下焼ほど送らせ給へば、また興ありて末社共が働にて、二葉大臣様をお床へ入れますとて、かの伽羅を櫛櫛に留て、太夫様に頭から帶とかしまして、ゆつくり添寝をさせませ置き、宿の口鼻が申せし、此里のならばせなれば、御守刀を預り置くもなほをかし。其後太夫



は末社の何れもお床に呼び寄せ、二葉大臣の寝姿を懐開けて見せ給ふに、細目にして太もゝの暖なる所へ足を持たせて、扱も粹らしきやうだい、親父様へ語れば相床より襖障子を開けて、喜悅の至りと又座中は酒に成りける。大臣自らお目覺め時に成りてむつからせ給ふを、太夫抱きあげて、色々お氣に入りてすかし給へども、更に泣き止み給はず、さりとは迷惑なる所へ、なにぞと鸚鵡が参りて、二葉大臣様を抱き取り、この口舌は我々が手には及び難し、詫言頼む方があるとして、お乳母殿に渡して懐にてつる濟みける。其程なく暮れて、門閉め時に御機嫌つよく御歸宅ありし。是を思ふに金銀捨てやうのなき奢、一國一城の町人ならば咎めにも遇ふべき事なりしに、王城に住める徳には世上の聞えを憚らず、我物遣ふて、仕たい事して遊べり。たとへば御車造りて妻女に十二單衣を着せて、内裏様事して遊ばふども、内證にては人の咎めぬ世や。

## 二 是は房崎の大臣

大方の事しては面白からず、晝の月見、夜の花見、世の常を離れ、人の爲の事を爲るこそ悪所宿の自由なれ。其身に何の徳もなく、金銀のあるに任せて女郎はなる事に拵へ置きて、高位の淫亂にも劣らじ、唐の帝の待つ花運きを咲かせん、必ず雷の音にて開く事あり。あまたの宮女に鉦鼓を打たせ、これさながら雷神の如し。此響に殿庭の美花一度に色香をあらはしたるためしあり、なんぞの金ひかりで夜の花見を思ひ立ち、言ひ出すからは聞かぬ氣の男ありけり。奈良の兩の手大臣といへるあり、此古事は花月、小太夫、女郎二人まで請出して、我宿の樂寢、右に左に三つ枕をならべ、春の夜の慰み替て、古の八重櫻の名殘、千本の木末に紋付の數提燈を吊らせ、飛火の野守も出て見よ、今の全盛恐らく此鼻の高きに二月堂の杉に棲みて、羽の生へたる人も恐れ給ふべし。木辻鳴川の色女呼び寄せ、撥音やかましく、京大阪の跡を唄へり。昔都の時は知らず、今のせばき所には氣の宏き大臣なり。不斷堺の浦より新しき鱧を取寄せ、此刺身なくては膳を据らす、其の夜着に幅廣の瀑布を織出させ、今世に流行れり。此人色道ばかり賢く、渡世



の事には疎し。親より母屋作り、家藏箱入にし七百貫目、伊駒の谷にて田地十五丁、此三つの寶を渡されけるに、家藏田地は残りて銀子は遊女に取られ、何ごも内證さし詰まり、母親の隠居銀盗み出したき智慧にて、此大臣身をやつし、母の近ふ遣はるゝ腰元の久米といふに逢ひ馴れ、腹に仔細の出来し時、珠數袋の鎔取出してくれよと頼めば、是は命勝負なれども、いとしさのまゝ身を捨つるなり。若し此鎔を盗み出したらば、身もちなる子種をおろさず、大臣と言はるゝほどの女郎買になして給はれと約束して、相違なく盗みて、又銀も悉皆みなになし、ある程の財寶を人の物として、後には無分別に頭剃りて身の程を忘れ、世間の耻をかまはず、元興寺の恐ろしき門前に臥して、朝には女郎の名寄を觀音經に作りて、之を讀みてたはんを申し受け、夕には竹箒をさげて一丁を錢一文づゝにて掃き廻り、夜は傾城町に行きて昔を今に女郎の善惡言ふことうるさし。何れ此法師が會はざるは一人もなし。世の聞えをいやがりて、一文づゝ遣りて其事を言ひ止ませけるに、次第奢付て悪口言ひ止み、賃値あげして後は三文づゝ毎晩取りければ、

この所の揚錢八十五匁と、外に三文は木葉坊主が取るご大笑ひになりぬ。

### 三 久七生れながら俄大臣

黒衣を着すれば出家、烏帽子しゝはり着れば神主、長劔差せば侍と成り、世に人程化物はなし。殊に今時の大臣といふ男、先祖の筋目また生れ付の氣高きにもあらず、それゝの家業に仕合せの良き人、詩歌管絃に身をなすにもあらず、遊女のもて遊びを専らとして淫酒に亂れ、金銀を費す人を言へり。其形ちを見れば黒羽二重に三寸紋、紬の大島の長羽織、あたまつきは物のいる事にあらず、何時かにも是には成りぬべき風俗なり。爰に難波の北濱に、伊勢屋といへる上間屋、何れ長者に似たり、皆人の物にて外聞つゝむ丁銀、毎日宿に山なして勘定は合はずと、女郎にさへ會へばと、浮世小路久右衛門が忍び駕籠、誰に隠るゝともなく我内より乗出すを、怪氣すべき内儀のさはなくて、指櫛ぬきて鬢撫で付て遣る杯、仕立着物の仕付の糸に氣をつけてぬぎ捨て、また今宵も仕舞ひ太鼓までならば、



七つ時のお歸り、湯風呂を焼せ置くべし。久七お實は持つたか、提燈に替蠟燭は、  
我も拾一つで寒うはないかと、諸事に御心遣ひ、餘り結構過ぎてお留守に何事か  
あると、人には言はず疑はれける。お物好は丹波屋のお琴、にがりの走りたる太  
夫、客をのかせぬ仕かけの名人、頭はいつとても口舌にして、中ほどは鼻息あら  
き事二三度もありて、跡は男を涙もろくして、たんと嬉しがらせ、大方の身代は  
分散に程なし。久七毎夜のお供に心地の良き事、見るに銀欲しく、聞くに勝間木  
綿のふんどししめて、あたまもちあげる物に異見して、汝我やうなる者の身に付  
添ふ事一生の不仕合せなり、如何なる好目に掛けたりとも、これその少しもひげ  
る事にはあらざるに、女郎は掴み取の中に来て、その事もなく歸るをさぞ口惜し  
く思ふべし、今こそあれ我も男盛なれば、一たびは出世して重ね蒲團の上にて、  
榮花をさすべし、時節を待てと、小間がりにて無常を覩じ、はや更る夜も八つの  
鐘、人は床の別れを嘆くに、我は歸るを喜ぶ、己れも耳はなくて肝腎の首尾を、よ  
うは聞く事ぞかし。逆も叶はぬに、もは静まれと、門口の柱へ十四五度も打ちつ

けてその後別れ、鶏をしめる如く小首をねぢまはして膝の下に敷つけ、未だ思し  
て跳ね上るを帯に挟みて、前巾着より布子の質の札を取出して、是を頂かせぬれ  
ば、草木心なしといへど、花代のむづかしきを合點して、いつとなく常の物に辭  
まりける。定め難きは浮世、これ迄頼みし旦那は次第に衰へて、昔の見世つき替  
り、錢屋と成て、絹物は帯にもせざる亭主が手かるき鐵槌にて、烟管の火皿を扣  
き伸ばして居れば、十一二なる男子が、人に札貰ふて又太夫が舞の芝居へ行くこ  
言へば、札は只でも、草履が地から生ゆるかと白眼、母親らしき人暖簾上げて内  
に居ながら御城へ納まるお銀箱通るに、これ程よき見物はないと言ふ。久七立ち  
ながら聞きて、あの心入れから此家を買ひける。昔の旦那うつけものと、それよ  
り分別して俄に始末して、何とぞ年月の願ひに、九軒の廣座敷に一夜太夫としめ  
やかに寝たらば、世に思ひ残す事なしと、色々思ひ入れしに、一代の中に其なる  
べき才覺なし。されども人の仕合せは知れぬ物、久七此季御奉公勤めし方は、さ  
る仕まふたやの後家で、大人しき繼子の後見しておはしけるが、久七お氣に入り



仔細あり、つい聞けば異な事に聞へしが、いたづらにはあらず、親からの宗旨を大法華になりぬ。是故内證銀を借下され、商ふ事の幸ひあつて、米は夜のうちにあがり、夢見たやうなる分限に成て、次第に大風吹つける如く、相場物に利を得て、爰が銀子の遣ひ所と思ひ定め、久と替名して、昔のよしみある揚屋へ行けば、時々の様つけて俄大臣と言ひなして、末々が笑ふも一步で其口をふさぎ、はじめの程は名代を吟味せし太夫も、いつとなく首尾してもつてひらきて相自慢、後には久七が昔を残す角の相敷おとしきに山といふ字の定紋を付け、其氣に入て商ひ事してとらるゝが、其親方の仕合せなり。何れ一座はをかしく、膳居すまる度々に頂いて喰ふなど、是はまだしもなり。知らぬ謠にすまたの手拍子、盃の間かひを頼めば、もとへ戻さず、禪筆の細字の掛物を秋の田のかりほの庵のと讀むやら、さまざまわけもなく片腹痛きをおし避け、同じ客ながら機嫌を取るはうたてかりき。されども二日拂に朔日の夜の寢覺のよきことひと助かりなり。よろづ洒落たる大臣は、女郎宿屋の男子まで氣のつきの事なれども、年取の伊勢参りに神ぞく迷惑する事必

なり。聞きにくいことを堪忍するが身過なりと、俄大臣を仕込みしに、其程なく粹仲間に入て、落しの咄しも當座に作り、女郎の偽をいやと言はせぬ改めやう、はやらぬ女郎の長持に灸すゆる内證の事までも知りぬ。さても此里かしこくなり給ふと言へば、大方中つもりにして、未だ一年足らずに二十三貫目の學問と言へり。久七が太夫買ふべき事は結ぶの神も末は知らせ給はぬ事ぞかし。

#### 四 夢にも始末郎大臣

榮花も己が心程にして通るものなり。さる末社男時雨して物の淋しき夜、我が宿は淺草川の浪枕、寶舟に乗たる心地して、いかひ比見たこともない善き夢に、番町筋のさる御方様に付て、忍びの内棧敷に居て、猿若勘三郎が芝居を見しに、日頃はふつくと野良嫌ひなれど、藝の間に尋ね來て、べつたりと凭もたれかゝられ、口添へての小盃、これはなんともならず、欲しや金子貳兩、こよひ此氣より移りて、あの子をさて我物になして、惣釣に結たる髪のわけ目を、此鼻先へ觸さわらせ、



晝の狂言にお姫さまになつたる尻つきは、爰であつたかとさすりおろして見たしと思ふうちに、此大臣は屋敷へお歸りの首尾に極まりぬ。色々止めても明日は御番の由これ残念とばかりに、少し送り参らせけるに、さらばへとお言葉の下より、御鼻紙一折お手自ら給はれり。すぐに笛吹の喜太郎が方に見れば小判五兩、是は自然と天の與へる所なり。我等其子に執心、最前より今に止む事なし。然る折ふし此仕合せ、何卒才覺して會はしてくれよ、偏に頼むと言へば、それは我等の手に入たる事、先へ御案内申して御同道仕るべしと、宿を出て行くを、是々と呼びかはして分別すれば、袖が三匹買はるゝによつて、是は先づ止めにと言ふ。平に／＼遊ばせ、身金ではなしと勸むる。いや／＼とせぬに極めて後、小判を横ひだの巾着に入ると思へば此夢は醒めける。さりとは淺ましや、夢にさへ無用の始末をして、これ一代の損なり、思ひ切てすれば、夢の心の樂しみなる物をと、此事を人に語りて常々さもしき我身の上耻ぢける。昔法師の女郎町では物くるゝ友と書き給へり、これ程耳寄なる事はなし。惣じて女郎買一座の興に、太鼓の者

共迄に、格子ひとつも買ふて遣る事何とも思はれず、此銀とても拂は同じ事なれば、此三十目を願はくは一角生で給はるが拙者共が勝手なり。とかふ言ふ中に十二月十三日春の事始めとて、武家在家の煤掃、白猫も着物を着更へたと思ふばかりのちりほこり、お札古札納めが聲せはし。我流るゝ質札納めんと言へば、乞食さへ笑ふて、不斷着の紅裏寢道具なしに房付枕、てつきりと役者か太鼓持の貧乏したるなるべしと言ひ捨にして行くを、無理に呼び返して、只今の目利徹屋も違はぬぞ、その證據にはこれ見よと、文反古のすたる掃き集めて取らせければ、己が吠には入れずして、一つ／＼皺延してこれは三浦四郎左衛門が抱への二代目の高尾、さても手跡の見事、吉原の前後あるまじ、色は少しあさ黒けれど道中そなはりし太夫なり。是は山本屋峰順が抱への利生、文懇に書く女郎なり。今にはつとしたる氣が止まぬかじやまで、彦左衛門抱への吉野姿のうつくしき程文はすこし、是は高島屋の花月三笠、さりとは取まざるゝ程の文づら、姉女郎の三舟が手振をうつすが故なるべし。これは又左衛門抱への大和泉筆勢も心も強し、殊に座持



と、廓の仔細を言ひける程に、俄に心をかけて昔を尋ねしに、始めの程は人の沙汰を聞きましての事と隠しけるを、是非に尋ねて酒を勧めけるに、一つ喰べれば忝なし、併しさもしき身なれば、お心ざしは頂きて、盃はこれにありと懐より出だしけるに、花菱の紋所、見たぞくは是は吉野様ゆかり、あたら身體櫻に散りてこれかと言へば、此乞食涙を流し、花は昔に枯木となり、材木町の四の二と言はれし男なるが、明暮十年餘りの奢、それはくは大名も我に逢ふては續かざりし、親仁さまくはの異見して、追付五器下ぐるを見るやうなと言はれしが、その言葉違はず、我袖乞するは親へ孝の爲めと笑ひけるが、承り及びしに、人は知れぬ世の中、さほどまで成らせ給ふは痛まし、私方へ毎年大臣の御方から、大分の歳暮の御祝儀、それは寶の山なり、推し詰て尋ね給へ、少しの合力申さんと約束して別れける。此年の暮の心當金子三兩と、思ふ方より錢一貫、御着物羽織と極め置く方から、白石の紙衣一反、すくなふても小判二兩の所から野老一折、客の中での内蔵と存する方から古き蚊張を給はる、時分ならぬ物ながら、之を下されける

御内證さぞく、又幾年か五俵づゝ給はる方あり、これは違はじと思ひしに、やうく餅一重ね、これ程胸算用の違へる事なし。最寄乞食その暮には見えす、明て六日年越に来て、大臣の約束節季には違ふ物じやがと言へり。

## 五 夜の間の賣家化物大臣

河州倉橋と言へる里に、水仙の早咲、毎年後の名月には花初めて白し、都の高家方へあげての跡、民家の口切に出しぬ。花一輪を金一步に定つてこれを求め、茶の湯に合せて花屋より方々へ一日づゝ賃銀取つて借しぬ。いかにしても數寄者の心入にはさもしと言へば、堺の乳守にて太鼓持の港、鹽の甚と言へる男、これ花車事ながら、値段の高いものなれば、賃とつて賃徳と申、然らば女郎にも借賃取り度物なり、大分の銀出して買ふて置きながら、惜氣もなくやうは貸す事と言へば、折節その揚屋に小天神にて口きくし女郎、年は疾く明きて買掛の差引に身を儘ならぬ女の、心に常々有る事を言はれし。何れ女郎の賃借は言ひ合せて、仲間



法度に仕たきものなり、親方はかまはぬ事、女郎の身にして十年勤むる内の損は何程か積り難し。鼻紙屋の書出しを見る度、貸して只のつらく思へり、せめて紙代とつて貸したいものといふ。各々呆れ果て、この堺程の所に、太夫の出来ざるは、そもくの姉女郡のこざかしき風儀を見習ひ、今に座崩しの女郎ありとて、大笑ひして無用の事を聞てもいふても更に腹のふくるにはあらず、けふは鮫汁して死なば其身の仕合せなり、逆も行先の大晦日、人が生きては置くまじと、まだ遠いこと案じて何の役にか立つべし。酒壺さして盛れと言ふ所へ、中濱の大臣御越、是はと金杓子持つて、甚が立ち舞ひければ、悲しや九日何ともならぬ精進と仰せける。けふの佛様どれか存せぬといふ。扇屋の夕霧が日と、言ひも果てず涙ぐませ給へり。大臣これは命惜み、ぬけ道なるべし、其太夫とは散々無首尾、存じました、そんな事は言はしませぬ、日本の帥の寄合爰といふ。その無首尾忝なし、それ故跡を弔ふなり、仔細は此女郎古今の大好、備はつての上手、かりそめに四五會出合ひしに、身のすたるを覺えず面白かりし。追付命を取らるゝ時節

の口説、中直るもやうせし中に相果て、我等が爲めには命のかはり、これは過ぎ行く昔、此太夫にせめて心ざしの似たる人はと吟味して、葛城様を指圖して、けふよりこのお女郎一代は外へ買はしませぬ、合點じやと請合て、南北の客一人も合はずなど、かため上の御祝儀、末々まで小判の花咲きぬ。中濱がかゝるからは、とてもつゞかじと、男は残らず退きける。葛城別れての明の日届けの文遣はしければ、門の戸に賣家として札あり。



好色盛衰記

一名「西鶴榮花咄」

卷二

目録

一 見ぬ面影に入聲大臣

世を宇治の里に天狗頼母子  
京にひとり娘有といふ事

二 悪所がね預け大臣

人の命は儂なや淺草川は彼岸  
揚屋の精進飯も殊勝に存する

三 都を見ずに藻脱け大臣

親の譲り銀五百貫目也  
室津の遊興は鹽で淵の如く



四 難波の冬は火桶大臣

物遣ひながら床の不首尾は迷惑  
下ればさがるものなり太夫より二分迄

五 仕合善し六藏大臣

書置なしに大分の貰ひかね  
投節も小室節も聲は同じ

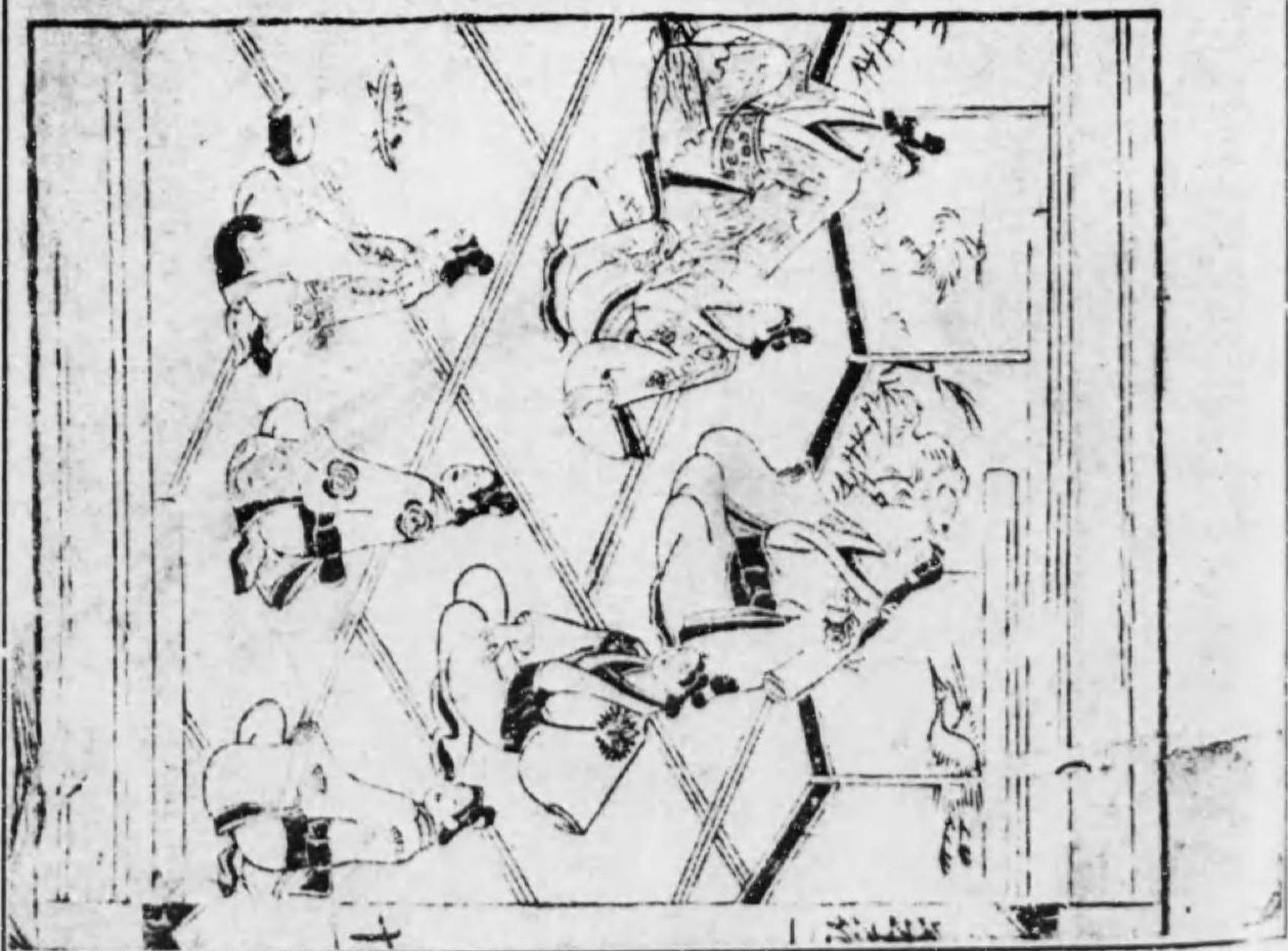
好色盛衰記 卷二

一 見ぬ面影に入聲大臣

母の親のならひにて、たとへば乙御前の面なる娘も、我子自慢して宇治の花園に  
二尺六寸の大袖つづき、木幡は姿の山と成りて歩行よりぞ行く。都男秋萩の優し  
きは見もせず、唐人寺の門前に立ち止まり、當世衣裳は耻かくしと、ひとりく  
に讃を付て、いやがる耳こすり言へるは、深い罪にも成りぬべし。折節野邊の尾  
花分け来る夕風につけて、これは聞き馴れざる名の木の薫り、次第に鼻驚かして  
見しに、樂乗物の窓の飾り、五色の玉房、青籠の中に又ひとへ絹、もみぢの障子、  
姿あるとは見えで、知れぬ人様、つきくの女房さへ外より優れて随分出立を盡  
しける。此若い者共、見ぬ乗物の中をこがれて、戸のあく迄と跡を慕ひ行くに、  
此女薦たしなみ深く、終に面影見せず、寺社にも代参りさせて、程なく朝日山も



暮になりぬ。京歸りを取り急ぎて、内八文字の蹴出し歩みも、自らにくづれて、沙ならむ川端に蛤にちりて、据腰ふなつきて、行き亂れての供廻り、皆々御息女に付て、跡には母親の古乗物に六尺二人淋しく、此外残る物とて、松の横風のみ、水の水上浪かけて、長橋越えて東詰通圓茶屋の前に編笠深くかぶりて、小庭に座を組み、紙衣脱ぎ捨て、身の成る果は天狗頼母子とて、馬方柴男の小錢を貪りけふを暮しぬ。此男過し年の盆までは、祇園町を踊り廻りて、川原の左内臣と置はれて、藝子にある程参らせあげて爰に隠れて、都の辰巳角は家質に流れ、今はあの仕合と人は言ふなり。最前の京の者共も顔見知りて、哀れ昔を思ふ折節、彼母親耳近く寄りて何やら内談せしが、左内を我乗物に移し、二人一つに戸をさして、六尺共にこの事沙汰なしに、頼む〜と聲ひそかに前窓より手を出して、髪水入の底のやうなる黄色の物を一枚づゝ給はりける。一人さへ肩換へしが、息杖捨てゝ急ぎぬ。扱も止まぬは此道、今の母親と見えし人は、頭に黒き筋なく、向齒生きながら高野へ納め、何が浮世の面白く、男狂ひをする年かど大笑ひを千秋





樂にして立ち歸る。左内は寢もせぬ夢心地して、娘の親に連れられ行くに、所は戀の中立賣、以前は商ひ見世を取直し、奥座敷に直して、向後是の養ひ聲と、さまざまの響應、何とも分別に能はず、かく詐りて人の命を奪る難病の薬に我を要るかど物おもふ。小夜更けて身を震はせけるに、母親左内が案内して娘が事を末々までも頼むなり、必ず見捨て給ふな、其代りにはせめて二年も過ぎたらば、財寶此方に渡すべしと、頼母しく戀にの給ひて、娘の寢所に入れ給へば、自らが殿子かといふ聲常に替り、形は而も美女めきて、目も鼻もなくつつへりとしたる顔也。これぞ徒然草つれづれに不埒なる時代違ひの白うるりか、又は難波の大寺に住める目なし稚子と言へる化物なるべしと、恐ろしきを欲より堪忍して燈火背きて、此娘が氣に入て見しに、夜もすがら身添、明けてもたはぶれ止む事なし。如何にしても晝は見る事迷惑して、乗掛かつたる事とて、十日斗り勤めし中に、いつとなく心もろかくとなりぬ。二とせ過ぎて金銀請取、内のいや勤め代りに島原通ひと思ひしが、念もない事三十日は續き難し、命こそ物種なれ、今の浮世に、よい事をさ



する筈ではなしと、腰元驅らして様子を聞けば、我より先に聲は六十三人替りけるとや。扱こそよい時分別出したと、筆を早めて三下り半、お定まりの暇の状を置き去りにして驅け出、あの家藏は欲しけれど、見歸りく逃げたるは、よくよくの事こそ思はれて是沙汰。

## 二 悪所金預け大臣

工夫の水學磯なり、江戸橋の下より乗出して髪振する間に、吉原へ通ひ舟たくみて、二挺立を仕かけ、韋駄天の茂作といふ船頭さる大臣を乗せけるに、上下二人は此舟の定めなるに、思ひの外あし入て、櫓は急げども遅きを不思議立つれば、風呂敷の中に、掛磯一つ有、是にてこれほど重くかゝるべき仔細なしと、様子を尋ねければ、少しの物が重りにかゝるかど錠まへ開けて出し給へば、裸金にて二千兩是に何になる小判と申、揚屋へ投銀と仰せられしに、昔は唐への投銀せしに、それは律義に明の年、糸巻物を送りぬ。是は氣遣ひなる所へ、大分の渡し金、

此かはりにはおいとしや、ゆかしやなづかしやなど、偽書ませたる御文が送り参るべし、扱も色の悪い小判や、脈が上つて御座ると笑ひける。汝皆まで言ふな、人の心の替るが世の中、寺社に末代残る石の鳥居を立るも、女郎狂ひの當座の樂しみも、さのみ替る事なし、何れにしても極樂へ持つては行かず、四十九日の道中は錢六文で済む事なり。よしなき長物語に悪所の揚り場、太儀くと言ひ捨て、常の揚屋に入り給ひ、亭主に彼金子を預け置き、是有る限りに八千代が爲めのよきやうにと言へば、さても儲成る大臣、太夫様の御全盛、今日よりはお鼻が金龍山より高かるべし、まだるい男は淋しがらせと、諸事面白き最中に、此大臣蕎麥切にて西瓜の喰合せ、やれ池の端の錦袋圓といふ間に死去の由申來り、是非もなき世や、嘆くに甲斐ぞなく、日頃お情にあづかり、御恩を受けたる者ども、朝精進するもやさしく見えける。女郎は此大臣の事言ひ止まずして、明暮身を捨て、其後は勤めのかたちはなくて袖を浸し、殊勝さ常の女に勝り、香花を手向て其人を弔ひける。されば揚屋へ預け置きたる金は、龜取坊が手に渡る野鼻と同じ、



二たび本へ歸らず、大分預り徳と沙汰して、せめては利銀の算用はして、毎年盃蘭盆に幸ひ歸る人あれば、言傳して遣れかし、極樂にも金の要らぬといふ事は有るまじ、兎角は死なれた大盡の損と、人の身の上の事を惜しみぬ。此揚屋無常を觀じ、預り金我慾にする筈あらじと、大臣にまします時の如く、太夫をあげて、月に六日づゝ萬事改めて精進仕立にして、太鼓に土手の道者といふ世捨坊を呼びて、大臣の改名春花夕山と位牌に書き誌し、是を正座に直し置きて、其日は外の客に顔をも見合さず、世の儂なき事ばかり語りて、酢がけの牛房、袖べしなどにて酒飲み暮し、過にし會毎のつめひらき、其人無理なる言葉に、重ねて我に泣せ、ある時は互に偽を争ひ、勤めながら自ら恐ろしくなりぬ。後は文さへ誠になりて親元を知らせ、鎌倉雪の下といふ所に、小家隠れに身をひそめ、目の藥賣て世渡りながら人の爲めとは成り、その身の目は世間もあらはに見え給はぬ事の悲し。古里に有し時、母人と連れて由井が濱の干潟に出で、藥を容るゝしやれ貝を拾ひしに、江戸より女見といふ者來りて我を見立て、是非遊女にと勧めしが、二親同

心なきを、佗しき住家をうたてく、當分の難を助けたく、十二より此里へと語るに、大臣はるゝと雪の下に尋ね、親共に御懇なる數々、此御恩忘れも遣らず、其上歴々の女郎衆におとつれず、今此の家の太夫と言はれしは、皆是其御方の光りと思へば、何事も昔と、前後を辨へず嘆くにぞ、亭主内儀御機嫌取の男まで眞の涙をこぼす事、揚屋にては珍らし。初時鳥音づれ、死出の夏山獨はさぞ淋しく越し給はんと思ひ遣られ、夏の夜の短き命、明なばまた當世奢大臣、駿河町組の大騒ぎ、富士を廣庭に移して、時ならぬ打綿の白雪、峯より伽羅の煙きらす、我等を天人の姿に美を盡し、たはぶれらるゝも面白からず、けふの佛の事を思へば、流れ立つるといふ身程世に悲しきはなしと、譯もなふ取亂されしに、此思ひ晴しに、御床をとつて太夫さまを先へ寝させませ、大臣様是へと、彼位牌を床へ入れ参らせ、死ね死ぬるといふ御中、是じやとざつと笑ひになしける。昔の袖の香、抹香の薫りに移りかはり、しみゝと肌身につくれば、夢一結び覺めて、不思議や此位牌汗をかきて生きたる如くに暫らく動き止まざりき。



## 三 都を見ずに藻脱け大臣

寶の嶋といふを何國かと思へば、長崎の事に極まれり。唐人船の大港、錦の山、白絲の瀧、流れ木の伽羅を筏に組み、麝香犬は和朝の猫より見え渡り、丁子は葉茶の煮殻の如く捨てありきて、金銀摺み取の所、一夜に長者とも成りぬべし。さるによつて淫酒の二つに世を暮しぬ。爰の下戸といふが上方の呑自慢するよりは、大分強し、樂みのさま／＼あり、此浦の隠れも無き大臣、男子三人ありしを、惣傾次男迄は所にて家業の榮花に仕付、三男末だ渡世定めず、或時一門振舞の中に、て親仁中渡されしは、汝が心任せに身体をありつけん、銀五百貫目譲るべし、これを利貸にて京より見立妾女一人、其外召使、以上八人にて心易く暮しぬるか、それもむづかしくば朝夕は隠居すまし、毎月兄ども手前より金子十兩宛請取、丸山の女郎狂ひしやるとも、又は飛子の遊山なりとも勝手次第、又壹萬兩敷金にして、肥後の熊本に歴々の人美なる娘あれば、是へ入贅になりとも、年々限米貳

百五十石づゝ納まる田畠求めて、世間にかまはぬ里住ひも心易かるべし、此中何れなりとも其方が望みに任せよと申されし、良き親を持つは其身の仕合ぞかし。さりととは結構なる事を、此三男少しも喜ぶ氣色なく、せめて兄達の今迄遣ひ捨し惡所金程給はれば満足なり、如何にしても五百貫目の幅にては天職も思ふまゝ、成難し、まして太夫は及びもなし。たま／＼形も大臣らし生れながら、名を残す程の奢もなく、是を思ふに末子に生れたる浮世の損なり、只今の言ひ渡しの分にては世に住む甲斐はなかりき。兎角分別致したと座を立つて退きけるは、今はな花ゆすりといふ仕掛けなるに、時代違ひの親仁驚かれて、懇なる人頼みて、願あらば聞くまじきにあらず、我等女郎狂ひせし時は、年中に百目か百四五十目にて罅を明しが、今は大分要る事を知らぬに偽りはなし。諸事こなたを頼むなり、忤が人に指さ、れぬ程女郎遊びの銀渡すべし、何か惜むべきと子に迷はれし時、長崎の太鼓持に算用道入といふものは是を承る。所に人も多きに、此奢法師を頼まるゝこそ因果なれ。人は一代男、名は末の世に残る物、金銀は涌く物、此三男は私預りて



都に同道致して、天晴大臣に仕立申すべし、こなたの御子息と、世の聞えもあれ  
 ば、爰は座頭官にのぼすと思召、御太儀ながら外に御隠居金三千兩御合力なさる  
 べし、随分わたくし始末致し、三千兩を二年に遣はせ、都の色里にて三男恵比  
 須大臣と祝はせまして、追付分知りになすべしと言へば、此親仁嬉しく、然らば  
 京の遊山を見せて給はれと、道入に金子渡し、早船にとり乗り、西風に戀をふく  
 ませ、浪路を走りて播磨湯室の色港にさつと着きける。こゝに一夜はかゝる情と  
 て亂る、柳風呂に入りて、此所の瀑女小左門といへるは、風俗戀の奴子やこにして、  
 江戸の勝山が仕出しに替る所なし。女はさもなくて、客の思ひつく事内證に良い  
 所あればこそなれ、是に逢ひ初めしより、日和の出舟に乗らず、口舌に錠を下し  
 て室津のつづけ買とて、女郎ある程仕切りて、日毎に慰み替へて遊べば、俄に爰  
 の繁昌、或時は此津の家々に火を焚かせず振舞して、獵師馬方草細工人迄も、  
 其日の身過ほど價ひを取らせければ、正月にもせぬ歌ひ酒盛、是は何事が出来け  
 るぞと、遊興のうちにも氣遣ひ致せり。室の遊女を心當にして、國々を出しより





覺悟の前巾着に駒銀を入れて、此濱に熊と舟寄せけるに、思ひも寄らぬ惣買、前代聞きも及ばぬ大騒ぎ、皆々思はく違ひ、是非に叶はず禪しめて、堪忍する夕暮の恨み、曙の出舟に己れが金銀で仕居る事ながら、餘り成る狼藉、これぞ喰はぬ殺生とつぶやき、今は兵庫にも譯の女なければ、大坂まで泳き着くやうに浪路を急ぎける。長崎の大臣爰に浮れて日を重ね、三千兩の袋も秋の夕の物哀れになりて、都の春を見る事思ひも寄らず、櫻も吉野も金太夫も根引と思ひし金銀を、面白からぬ遊女にむなしく、これぞ下帯の錦、人の見ぬ事に結構を盡し、阿呆鳥の月夜に夜が明て、白けて歸る其時、此ほどの付届するに三千兩は相渡して、今貳兩三步足らぬに、乗物蒲團一つ、春日の作の守観音一鉢、三人まへの辨當、水風呂、羅沙の柄袋、大小質に取られて、又長崎へ歸るは無分別者。

#### 四 難波の冬は火桶大臣

名を更へ品を替へて勤め女の行末をかし、一年大坂の新町に木村屋といへるより



此太夫を仕出し、其名を越中と改め、難波に五三は珍らし、初めの如く引舟付て堀江の水揚より一日も隙なくて、蘆の一夜の情を競ひ、久敷此里めいりけるが、人は移氣にして又色も狂へば若やぎて、後れたる大臣もどつて出づれば、太夫天職十五迄も自からはやり出で、女郎一入作りなし、親方より流行衣裳の仕出し、素足に雪踏の音高く、禿も鼻紙目に立つほど入れて、内のよろしきにや、あがり膳に氣を移さず、遣手も布子の色あげして、前垂も常に替りたるやうに見えける。萬の商人後先知らずに掛賣すれば、當座のくがひつとまり、無上に幅をやりて、中卑なる良も鼻高ふ見えぬ。一切の女郎に位のつくは、何時からにても客次第なり。慥成る男あれば、自から張強く一座もでくる物ぞかし。中にも通り筋に風俗外に異り、心餘り、我ぞ太夫と思ふ顔つき、諸人これを惡みしに、形見よげなれば素人好みして、一つ二つ逢ふて見る客重なりて、賑やかに成るに隨ひて、俄に勿体つけて淋しき時を忘れ、内證の御無心に手を合せて詭言したる男を、今は見ぬ顔するもむごき心入ぞかし。よくく世の事を案するに、金銀持ちあまりて白

由する大臣は、大方にもつて參つて、折節も振る事、女郎に張あつて聞きよし。色の道なればこそ三月迄の借米、なしくづしの借錢、買置して賣損の銀廻し、又は家質、或は連判銀、是等は命にも代る程の才覺なり。此悲しき銀遣ふ男を、いかに根のとげんがしれたとて、そこくにあしらひ、首尾する一夜を一世一代の事のやうに思ひて、一時が拾五兩七分五厘づゝにあたるなり。三番太鼓まで遊びてから、積りの有る事なり。四座の棧敷を金一枚、是は大勢の仲間借もなる物なり。これ程高い物はなしと算用して見て、無常觀する男、宵よりいふこと微塵偽りなく、お情に預るなど又もない御縁と、こはく御身に近寄り、耳の邊りへ口を寄すれば、酒嗅いとて面を背く、男律義に息づかひを止めて、お手が外へ出ましたと痛はれば、これ程の事は覺えが御座るといふ、男取つく鳥もなく、智慧なし千鳥の浪枕、寢覺異なものになつて、捨て起るも惜く、又小語て白銀の茶碗が一つ有るが、こなたには要りませぬかといへば、こゝにあらば貰ひなりともしましよといふ。宿にあれば當座の御用には立ち難し、必ず明日は持たせともと言ひ



さま、前へ廻れば又後ろ向に成りぬ。夜も更て帯もどかずに起き別れぬ。此行方ゆきかたの男には目塞ぎて首尾してやるが道なるに、幾度か客にうたてがらせしが、人同じ顔にあらず、此太夫淋しき秋の頃より名月と呼び替へて、天神もむかしの老松の時雨、濡も次第に聞かず、色にあまれる紅葉と名を替へ、鹿の位に下り、程なくほのかといはれて、壹匁取の端局に出でしが、今に太夫の面影ありとて、大臣も物好に遊びにあがりしが、万人好かねば二匁に下して、越後町にて三笠と言ひし事久し。年も二十四か五になる迄振袖せられ、悲しき勤め、めがたく若い顔つきをするを、あれは太夫時さへ九袖なりしかと、見知れる人の笑ひぬ。それより初川とやさしき名をつきて、壹匁取になりて、阿波座の東町に見えしが、此時は人も忘れて、言ひ出しぬる正月もなし。その後は分にして五分藏ごぶざうに成り、よし原町の中程に腰張なしの局住ひ、昔の花色縞子に變りて、河内木綿の鶯茶に、將棊の駒の染込、是も早やりて勝間の內衣も薄よごれて、貳分づゝまで、太夫より一生の中に下りぬ。流れの身の行末必ず知れぬ物ながら、是まで衰へたるは例少な

し。太夫の時床にてつらくあたられし大臣、悪さに訪ねて八文の火桶、消炭貳升合力せしを笑はれもせず。

## 五 仕合善し六藏大臣

夢見たやうな仕合、都の一富士に雪の面白き曙、大津の今六藏といへる馬方、己が一つれに別れ、それらは伏見へ、我は京道錦の棚へ干鮭かまぼこを送り荷、是も昔は生きて働く事もありなんと、異な物に無常を觀じ行くに、粟田口の山蔭になりしに、まだ明六つの鐘前にて、物の色はたしかならねど、京の人の聲して其馬八丁まで頼むぞ、一足も引かれぬと嘆く聞くに、哀れや、いかにも遣りましよと、荷物を街道端に下し置くに仔細なく、其儘に有つる事、今君が代の直なる道のしるし、丸の内に松といふ字の嵐も烈しく、北時雨も痛く降りて、鞍の上まで冷えわたれば、此乗手をちこちの立つ事も成難く、世の限りなる聲して、汝に言ひ置く事あれば、近くへ寄れと言ふ。氣の毒成る人を無用の情にて乗せけると、後悔跡へ



も先へも行難し。さりとは弱き御事、今少し行けば追分なり、養生成るべき事なれば、是口を開き給へと、岩根のさざれ水を手に掬ひて參らせしに、此男息をつぎ、我は親に勘當せられて武州に下る心ざし、空しく爰にて相果るに極まりぬ。京の所を言ふ迄もなし、死骸をも隠し、跡も弔ひて、我に成佛させよ、此肌着に小判千兩縫付しを其方に取らすなり。此金外の事になさずとも、柴屋町の女郎在ひして、我跡を弔ひ給れど、是を最期にして憐なし。是非もなき世とて、遺骸を關寺の邊に置けば、京の追手の者これを嘆きて、はや乗物にて連れ歸りぬ。四五日も様子を聞き合すに何の取沙汰もなければ、七日に當る日より俄大臣と成つて物の見事に迷ひ出し、年月熱心の女郎片端より揚て晝夜の奢、初めの程は銀の出所を不思議立てしが、何時となく言ひ止みて、物の見事にしこなし、逆鬢さかひんの頭つきも當世風にかはり、天目酒も忘れて、盃の遣繰も覚え、投節も小室節に替へさせ、後は諸分を辨へ、此男に出逢ふて續く大臣なかりき。次第に取出て、兵作といへる女郎に指を剪らせ、大津にならびなき帥と言はれて、馬を追ひたる時の形

はなくて、天晴六藏大臣、風俗も仕出し、女郎の善悪もよくあらためて、胸の焼つけといへる書物は、柴屋町の白鳥なり。此所にかかるはづみなる咄しの有るも、人皆聞き傳へて、六藏大臣の口なるべしと沙汰する程になりぬ。これを思ふに、銀さへあれば何時成とも賢く、花奢に分知りとなつて、女郎町の榮花殊更何事もならぬといふ事なし。今言ふも古けれども、極まる所は銀の世の中。



好色盛衰記

一名「西鶴榮花咄」

卷三

目録

一 難波の梅や澁大臣

雨夜の對物語新町の  
末社智恵なき神の事

二 無分別の三大臣

吉原を中年よつて見  
初なじみを俄後家にする事

三 反古と成る文宿大臣

寢覺の大鼓身をちらす  
西行櫻の町の番太が事



四 腹からの帥大臣

さる女郎のをとし子

風俗は肥後そだちの事

五 戀風しのぐ紙衣大臣

駿河町はづれに遊び寺

名譽靈寶拜ます事

好色盛衰記 卷三

一 難波の梅や澁大臣

世は次第送りなり、随分愚なる親より其子は又鈍なり、此如く色女も末にはなりぬ。大臣も今のやうにはなく、人の迷惑する程の偽つかぬ世の時、春の夜の雨に降り込められて、太鼓のなにかしが宿に仔細者四五人集りて、品定も事古し、女郎と對の物を寄せんと書付しに、きよろつく物夕霧が眼、今日の猿若。よう喰物小琴が食、川口の沙魚釣。塗る物寺人のいろは、和州が白粉。黒赤物檳榔子染、小太夫が首筋。ひよつと出た物心齋橋の皮癖の看板、背山が尻つき。なづまぬ物鬼の勞瘵、主殿が三味線。しるき物釜底の食、瀧川。人の知らぬ物釋迦の私銀、小倉屋遠州。結構で荒た物豊國、霧山が頬さき。ひんと反つた物取て置の雪踏、よし岡が向齒。香を嫌ふ物まんしうが口中、長町の西がは。大事にかくる物新九



郎が一挺、大橋が道中。せはしき物付送りの銀、大隅が目鼻の間。あとさきかまはぬ物闇の夜になりぞこなひの瓢箪、高間が心。廣ふて乗心のよき物かり切の舟定家が何やら。してもせいでもの物弟の精進、井筒が茶の湯。跡がさかつても買徳なる物米の相場、揚巻が目つき。尺に足らいでも用に立つ物もとわたりの錦、金太夫。黒うても堪忍して見る物翁の面、朝妻が鼻の穴。目のきつとした物よし田が座付、孔子の杉焼。首かくす物腹切の小芝居、早川が郡内編。ふるき物天王寺の楠の木、雲川。切賣にする物霜さきの狼、つまきが黒髪。明てわるき物八月十五夜、長谷川が口。ぬるいもの行水の時宜、妻崎。景もなふ細長い物こざつまが立姿、新川の堤。別の事もなふ慰になる物ゑんどうの菓子、定家。其日に替る物冬の半天、土佐が心ね。偽りにも聲の面白き物雪の夜の時鳥、初花が床。泣て人をおどす物千日寺のうぶ女、有馬が仕掛。かはひらしう淋しき物枯野の萩、かづらきが出前。松から下る物洞岸寺の藤、山の井。一座見るばかりのよい物淨瑠璃芝居の配り札、主水が酒ぶり。行末待物實植ゑの柿の木、藤山。物言はぬ物長

柄の人柱、萩野。いやなかたへつる物暑き夜の紙張、よし川。跡をふる物尾の輕きいかのほり、金吾。此外時めく女郎あまたなれば、つどく〜にいふに足らず、其折ふしは太夫は太夫と、形の花にあらはれけるに、今時の太夫は幅のある天職には見劣りぬ。天神は又むかしの鹿戀女郎よりは風儀悪しく成りぬ。十五かひひはまた局女郎より淺ましく、さりとては昔になしたき物は此里の諸分なり。しかし女郎は以前より一座かしこく、酒事格別あちやつて、偽も男のすける様に言ひて、慰になる事今ぞかし。されども勤め日の外、物まへの無心、我も人もいそがはしき中へ、迷惑ながら商賣のさし引は捨置、色町の付届、身の一大事と覺えぬ。これひとりに限らず、此道に足を踏込て深入をする人並ぞかし。人の事は言へど、よい加減とてやめるはならねば嘘の分散、残る物とてわけある文、ふすま一枚、敷物外になくて、春の夜の闇と替名呼ばれて、鬼にもまけぬ心根の大、柘木兵四郎を連れて、一盛は花之丞にたより、木蔭を野郎の宿に遊び、女郎は親屋の初瀬にたはぶれ、観音も同座に若女二色を見る事、春の戀風、葉末ちり〜の身と成行



は知れてある事ながら、うか／＼と吳竹の、伏見堀の角屋敷も人の住るとなし、次第に内證淋しくなつて、大晦日は闇と言はれし、替名も今思ひあたれり。月夜に提灯、晝の寢所、さかやきも起きては剃らず、鳴食、割海老のさしみ、たいらぎのあへ物、くすなの蒲鉾、美食も朝夕の費、心のまゝの若世帯、親仁より請取て八年に成らぬ中に、有銀六百五十貫目、家屋敷十七ヶ所、此外海船二十三艘、是に相應の諸道具、いかに賣拂へばとて、屏風かたし、鐵橋壹本残らぬやうに仕果てけるぞ。この惡所焼かざ直るまじと、幕坊主にさへ笑はれて、成果つる世の習ひながら、是は餘りにもろき。芭蕉布をうはばりに着て持つや、擔桶二つ難波の闇はあやなし、晝も身を耻ぢず、梅や澁賣となつて、今思ひ知るぞかし。四五年前に此色を見て炭汁去らば、襦袢は着まじき身躰なるに、無分別なる仕過し、女郎と野郎を一荷に買ひける酬ひ、一荷商ひするこそ痛ましけれと、關大臣様の身の上を、太鼓石車の伊左衛門が重口にて語りければ、五人の者どもそれはと驚き、盃下に置くもあり、明日の約束をし、女郎を先變がへに遣るも有り、一人の

大臣は我身もそれに近しと、此里を思ひ止まる智慧を出しける。又一人は久しく嫌に何も取らせぬと、紙入明けて一角出せしが止めける。太鼓持の咄しには身を知らずなり。

## 二 無分別の三大臣

氣を付て見るに、江戸の本町傳馬町の棚商ひせし若い者は、血氣盛んにして、大方は顔色青白けて、いつとなく氣病にて相果つるに人あまたなり。是を思ふに、閉暮浮世に暇なく、慰み里へも行く事難く、男世帯の煎じ茶、夜食は蛤の抜き身に、冷食も事足り、伊丹鴻の池の下り酒呑むよりは樂しみなく、小判はありながら、吉原三谷に引けて以來、見ることに絶えて、自ら此一つは堪忍身を堅めぬ。又京の室町通、衣の棚の若き者どもは、見た所は柔にして強い事あり。是といふも所々に自由成る色女拵へ置きて、それ相應の遊興に晝夜隙なく、腎虚してあたら身を失ひける。然れば江戸の男盛りは氣を盡かして死に果て、京の若男は過ぎて



短命也。何れの道にも死ぬる身ならば、二つ取には仕たい事して、無常野の煙ともなつたが増しといふ人あり。是に同じ心の三大臣とて、元材木町に棟を並べ、木曾屋の清、鎌倉屋の左、仙臺屋の久、此三人は世渡に賢く、相も劣らぬ分限、朝暮小判を貯める内談ばかりに、何れも四十年を暮せしが、此内の一人言ひ出して、迎も久しからの浮世に、いつまでか慾に身を凝らしけるぞ、今は金銀も有餘る身代なれば、思ひ切つたる色遊びして、世を心の儘に噪ぐべしと、今迄始末せし身を忘れ、三人心を合せて、とかく夫妻は戀の邪魔成るぞと言ひあへず、去狀添えてみなく、親里に歸しぬ。定め難き世や、三人の内儀俄後家成されはうたてかりき。久しくあひ馴染て、而も世帯を大事に掛けて、仔細もなき女房を、言ひ合せて去る事道を反きし奢の始めぞかし。今迄は夢に見し事もなき三谷通ひ、これ六十の手習ひ、御の字の太夫まさりの格子、今のお江戸の名取、四天王の中よりかせ山、青羽、宇治橋、此三人を毎日の續き酒、役日も常に外へ遣らず、前より逢ひ馴れし男を淋しがらせける。銀ありあまりて遣ひ捨るに、分別極めたる三

大臣なれば、中々是に張合ふ事思ひも寄らず、此廣い吉原を三人の幅にして、又珍らしうなしぬ。けふは白い鳥を瀬戸物町にて、金子五十兩に求め、月夜の明けも構はず、女郎の慰みに見せ、又の日は金魚生舟に集め、狂言をさせけるが、是もつる水になして、其次の日は江戸中の松茸の出初を八十五兩が物を買ひきり庭山に植ゑて、よねまじりの亂酒、ひと、せ小松殿、都の北山にての事、それは素人女の膝枕、何か面白かるべし。關東に隠れもなき今の世の格子、四天王を集めて、手相揃ての色遊び、三人ながら中年寄ての思ひ立ち、意見すべき親達は皆々先に立たれて、極樂の東門より覗きて、あたり財寶を失ひけるは、佛の身に成ても惜やと思はれながら、聲届かねば是非なく、草葉の蔭ながら悔まれし間に、算用なしの遣ひ捨、兼ては二十年餘りに此金銀皆になれかすと心當せしに、未だ面白き最中、四年が程に差引残つて拾七兩二分、松屋といへる揚屋の損に成て、わけもなふ仕舞ける。何れ女郎のいふ事を、それが心に叶ふ様に勤めて取らせなば、針を賤に積みてもつゞくべき事にあらず、參りもせぬ伊勢大神宮を偽の相手



に頼み、堅固なる鎌倉の姨を殺し、又は雪隠の屋根葺程の事を大普請するなど、色々に身ぬけてさへ、偽は女郎の商賣なれば、つゝには仕掛けられて有程は取られぬ。彼三人は女郎宿屋の嬉しがるより上をして取らせければ、この身になるも淺ましや、今もつて死なればせず、世をかせぐにもとでなく、谷中の末寺に旦那坊を頼み、いやながらの墨染、三人同音の題目、拍子太鼓に勸進を乞ふて一日を暮しける。而も日比は後生嫌ひなりしが、異な縁に引れて、斯くなるこそをかしけれ。むかしの妻それ／＼の後夫を求めて、壹人は通町の兩替屋、一人は神田の米屋へ行きぬ。又は三十間堀の味噌屋に縁組、世の習ひにて以前を忘れぬ。其門をも耻ぢず宿札見掛けて廻りぬ。三大臣が成果つる世や。

### 三 反古に成る文宿大臣

今の世の女昔なかつた事ともを仕出して、さりとて身をたしなみ、道具數々也。これに氣を付けて見しに、首筋より上ばかりに入物十六品あり、かりそ苟且に出しても、

身拵の隙なき事を思はれける。先づ髪のお、鬢付、長かもじ、小まくら、平元結、忍び元結、笄、さし櫛、前髪立、紅粉、白粉、齒黒、黛、きはすみ、おもり頭巾留針、浮世つゞら笠、あらましさへ此通りぞかし。こまかにせんせくせば限りはあらず、是に見較べて、衣裳は目に立たずして、古代よりは格別にむづかし。惣吉が仕出しの由なる染さへ、世に珍らしく奢りたるやうに思はれしに、此程京にたくみ出して、しのぶの細染といへるは、片面を六拾五匁に出来しぬ。油屋絹の本ごろ半疋、六十目の地を、六十五匁にて染る事、中々身代薄き人の成るまじき小袖なり。せめて其模様が人もそれ程に見て、晴着にもなればなり。ただ紺屋が氣をつくしてむづかしき物と、帥仲間にするばかりぞかし。是を好む人は稀成るべしと思ひしに、此細工人の許へ行きて聞きしに、早年内は請取ありとて、色々頼む人あれど請合ざりし。世間の廣き事、都の末々迄も次第に榮花の時を得たり。昔なにしても銀の番太せし九助といへる者、年久しく律義に役義を勤め、夕風に火の用心を觸れ、太鼓は我物にして、自然と三つ拍子を覚え、門の明暮、住所を



僅なるさしかけ屋根の板屋に、雨あられのいたく當るを玉の床と樂しみ、夫婦かたらひの思ひ出、男は草履を作り、女は足袋さして、冬の夜の寢酒も、一升入壺には一升入とや、口過一ばいの世を送りしに、ある時若い衆に頼まれ、嶋原への狀一つ持て參りけるに、賃は卸の並とて五分くれられける。大阪より十里の所を魚荷が言づくり來るさへ文一つを錢十匁に定め置きしに、島原は近き里なるに、これはよい事と思ひ付て、それより町中の忍び文を遺棄して、其の後は隣町の用ども聞て、一日に狀の四五十通請取、随分才覺して、人知れず返事を届けしに、番太が悪所の使ひするとは、何れの旦那も氣のつかぬ事を喜び、段々是を頼む人あまたありて、毎日二百三百の狀を捌き、銀百あまりづづ儲け取して、僅か十二年の内に四百三十貫目の分限に成りぬ。後は館樂師の前に居宅を構へ、使ひ男四人置き、京中の狀文、色里色川原の事は、此者埒を明る名代になりて、次第に福に金銀溜まりて、千貫目にあまりぬ。狀一つ五分の事と思ひながら、積れば戀の山と成り、内藏を建て、引出しに一二付け、百三十番まで女郎野郎の名を

書きて、見捨の文を預りけるに、重なれば一人のさへ千束となりぬ。この文宿のあるじ日毎に島原へは行けど、太夫の艶らしき言葉を嬉しがらず、揚屋の嬾が輕薄も耳に入らず、只賃にて文の事ばかり身過の種と思ひしうちに、久しく馴染たる女房頓死して、扱も浮世とうたてかりき。最早慾をも止めて、歩にかゝる家屋敷を求め、樂々世を渡り、世倅十五にならば萬事渡してと思ひ定め、愁に沈む折節、御懸殊更の旦那殿、今遣らねば太夫が手前不首尾の文と、けはしく申されけるを聞き捨には成難き御方にて、使ひ男の歸るを待たず、御文一つ五分の事にて、丹波口へ一文字に走り行き、中宿に息もつきあへず、野道を過ぎ鶴屋の傳左にたづね、書翰を太夫様に渡せば、物嬉しげに開きて、中程まで讀み捨て、涙をこぼし、明日は九月八日、拂銀を約束して、今と成つてならぬとは頼みし甲斐ぞなき、義理はかゝれぬ勤の身、死ねば濟む事とひとり言に云はれしを、何とやら哀れに思はれ、さし詰に問ひ寄れば、兎角金子十兩にて埒の明く事を聞き届け、此小判取替ければ、此時の嬉しさ、手を合して歴々の太夫殿拜み給へり。是を思



ふに物前の銀は、京も田舎も切れ物ぞかし。此貸銀縁となつて、いつとなく心通ひ、禿も知らぬ事一二度もあつてから、此男身の程忘れ、さる揚屋を密に頼み、萬事を小判かためにして、替名して逢ふ事五年餘りやうもく隠しぬ。此忍びの中に分里の秘傳ども極々しやれて、其身自らさやしやに、昔の風儀は失<sup>う</sup>去りて、いつの程より白けて通ふを、初めの程は文宿のそれかと言ひ立てしが、物の見事な捌きに、人皆言ひ止みて、後は太夫残らず自由して、一入仔細をやれば、外よりは過分の入銀、算用なしに遣ひかゝり、廿餘年に蓄め置きしを、いかなく七<sup>七</sup>十壹<sup>一</sup>匁も残らず、爰にて儲けしを又此里へ返しぬ。此大臣そもく番太をして、寢ぬ夜の夢見たやうなる榮花、覺むれば手馴れし太鼓ばかり残りぬ。拙なきは人の命、俄に無理死もならず、時節を待てば喰ひ物なし。二たび耻捨て、むかし馴染のお町に行きて、門の役人を望みしに、各々たはけの沙汰して、此親仁めを見限り、其の悴を取立、十五才にて元服致させ、若い所は堪忍して、夜番云ひ付ぬれば、お蔭ありがたしとて、月夜も闇もへだてなく、親に優りて用心の呼び聲良

く、太鼓ので、でん拍子を取り、公儀大事と勤めける。何も持たぬ身の寢醒心安しとぞ言へり。

#### 四 腹からの帥大臣

ちよろまかすと言ふ時花言葉も是をかし。西南二つの色所より、役者末社の言ひ出して、一座の興に成るぞかし。罪にならざる當座の偽をまぎらかすと云へる替詞と聞えたり。酒事も昔は女郎の口よりま一つ参れど、世間の仕宜に替る事なし。いつぞの程江戸の勝山が押へますと言ひはじめて呑む由、其の後京の三夕がさばりましよと言ひけるは、更に又しほらし。それより大阪の大和、是は少ししめましよと言へるは、猶また座興なり。次第にしやれて夕霧にさす盃を、ちと無理申しましよと言ひそめて、久しくこれを廢めず、今は長じて聞<sup>み</sup>の又あひ、孫あひなどいひなして、酒にいたたまず呑めるやうに仕かけぬ。盃幾たびか廻り終つて、捨て置きたる盃を、ぬしは誰さまか知らねども、是を拾ひましよと言ひて、吉田屋



のなるが呑み出して、今に捨たらぬ宿の嬖の挨拶よし。其の頃は色遊びの世盛、市橋が定宿、八疊敷の金の間はまくりて、勝手屏風になりぬ。此時の一步小判はかしこき鼠や引きける、今の錢ほどに思ひし、九軒に用聞きし魚屋の長兵衛、八百屋の八兵衛出合、二分一兩の賭六双を打ちて、目ふる間に五兩七兩の勝負せし事、商人は儲けよし、女郎は貰ひよし、禿も一步の四五十づゝは浮世巾着に絶やさすありぬ。今の貧さに見較べて、其時を思ひ出しぬ。されども色町の事は淋しき曙、にぎやかなる夕べに變り、飛鳥川の水の出花も程なく干潟となつて、浪の枕の定め難きは流れの身なり。何事も世は案じたが損なり。就中大阪は餘の所に替りて、出舟あれば入舟あり、肥後の熊本より商賣は米を買入れて問屋着して、しかも難波津始めての遊興に、新町の門立時、夜見世の眺めを望みて、宿の若い者を騒ぎの友として行くに、越後町の扇屋に兼て戀を定め置き、藤屋の玉かづらに逢へるは年久しく思ひの種となりぬ。此女郎何れに聞てもいやのなきもの也。此若い者今の北濱にて此道のわけ知りともいふて、苦しからぬ男なり。いかさま

肥後の大臣に此たび幅見せんと、随分帥自慢して揚屋へ内證申せば、まづ金銀福成大臣なり。さりながら初のぼりにて、この所へけふが始めての御出でなれば、幸ひ明日から祇園七日つゞけて、山も太夫も根引にすべし、是宿の繁昌満足か、日頃の御世話今もつて忝ないといふも艶らしければ、兎角口なしの花と、亭主は奇人の顔つきをかし。最前いふ通り、諸分合點の行かぬお客なれば、素い事ども有るべし。必ず笑ふなと上する女房どもにもよく／＼仕組みて、田舎大臣の氣を取りける。先女郎をかりそめながら一座に興あり、見え渡りたるは小太夫、かよひち、武藏、のせき、三舟、とよら、今の井筒に三笠、きよはら、敷島、式部まで、しばしの酒事、肥後大臣の取まはし、難波の梅も松とびた／＼と戀の海に沈みぬ。其中にねうちの高い太夫を見立て、あれを抓めとの御望み、同じ事にて良いものあればと消し心を申せば、大臣の言へるは、我その太夫になづむ所は一つもなし。顔思はしからず、然もお丈短く、形に優れたる所もなく、太夫職勤むるは何ぞ一つ人に勝れる徳あるべし。今の世の賢き人、うか／＼と四十六夕は出



さぬ筈なり、是非あの女郎に會ふべきとの御見立、是ぞ武田信玄の山本勘介を召抱へられしに同じ女郎の軍法なるべし。此大臣に手を置く萬事のこなしを見るに敵の嬉しがる仕掛け、宿屋末社下々迄に物の遣る時の首尾よく、床我物にして、太夫が偽言ひ兼る程の目にあはせ、女郎の文をそもくより一度も明けて見ずして、其返し事をするに、よねが心根見通して、帥大臣も知らざる遊女の秘傳まで中くりせられしは、聞き傳へ見及びての分にてはならぬ事と、肥後大臣の先祖をたづねけるに、此親仁の若い時、長崎屋の高橋といへるに逢ひ馴れて、此腹より出來たる子をひそかに肥後にてそだて、かしらから帥と成りぬ。念は生を引ける。

## 五 戀風しのぐ紙衣大臣

此門より内に女人入るべからずと札を立て、竹垣厳しく松杉奥深く住みなして、軒端に夢遊庵と額かけて、仔細らしく見えける。庵住はまだ二十四五にて、墨衣

は着れども鶴菱の紋の付たる小袖に、紫縮緬の細帯、物に構はぬ身の、何とやら目に立たぬ所は、駿河の府中淺間のほとりに身を隠しぬ。此人の昔ゆかしく訪ねしに、札所大臣と云へり。心にかゝる親もなければ、安倍川遊興思ふ儘なるを、いつの程かをかしからずと太鼓二人同行、以上五人にして思ひ立、西國三十三番廻るに言ひなしての旅衣、東國までも色所を拜み、残らず難有事に逢ひて、おひづるの小判皆に成る時、伊勢の中の地藏にて札打納め、親類まづは金に見限られて、けふの身の上迷惑するを、日頃の悪所の友いたはりて、何の僉議なしに捨坊主になし、折ふしの遊び寺、佛もなし鉦もなし、もとよりありがたい事もなく、諸分の女人成佛の咄しばかりに暮しける。ある時紙衣ひとつ奉加の爲に、持傳へし物どもを一七日靈寶出だすといへば、國中の大臣ぞめきに至るまで、この草庵に參詣して見しに、先づ京の左門が外の男は勧めばかりと、諸神を書き込みし起請文、同じくかはるが一刀三禮の小指、同じく唐土が年寄ての踊笠、同じくさんご十五歳の春、客と解き初の緋縮緬の內衣、伏見の八千代が竹の皮の香包、大阪



の衣がへが正月を頼みし断りの文三通、同じく大橋がひとり吞の爛鍋、和州が足の指の爪、同じく越前が可盃、同じく長津が手づから縫立てたる珠数袋、同じく半太夫が龍虎對のさし櫛、同じくあづまが萬貫ひ帳自筆なり、井筒が夜店の替提灯、是には金色の光りあり、堺のかつらぎが伽羅の小枕、宮島のせんじゆが鬘の髪、室の小左衛門が柿染の帷子、下の關の花鳥が一步二つの禮狀、長崎の金太夫が手合の女喜舟、奈良のきさきが晒布の夏帯、大津の虎之介が血のかたまりに作りし大臣の姿、江戸吉原の薄雲が勤の中無事を祈りし夏書、同じく和泉が手馴れし櫻田と言へる三味線、安倍川のやしほが細工にしたる花籠、其外諸國色里の牙ある女の形見、半帥なる大臣に拜ませ、進むる所の一大事は、悪所銀あるうちに京の島原を願ふべし。極樂といふて外になし、是秘佛と錦に包みし高蒔繪の箱あり。何れも是非拜み度き願ひなれば、戸帳揚げけるに、此前の吉野が姿をからくり仕掛のひとり笑ひ、目口の働き、手足のはたらき、皆々氣を濕ひなしける。我此身に成るも此女故と懇に頂かせける。

### 好色盛衰記

一名「西鶴榮花咄」

### 卷四

#### 目録

#### 一 一生榮花大臣

遊女まさりの地女あり  
奢の若死内證知れぬ事

#### 二 煙に替る姿大臣

仕たい事して心の残らぬ世  
きのふは町人けふは百姓に成る事

#### 三 情に國を忘れ大臣

昔残て太夫は格別  
かのえ申の日仕出し女の事



#### 四 目前に裸大臣

親方たをしの米買  
定家が指は切損に成る事

#### 五 菊紅葉鉢の木大臣

江戸から流行る笠人形  
思ひの切所強き女郎の事

### 好色盛衰記 卷四

#### 一 一生榮花大臣

出雲の大社にして、諸國男女の縁を結び給へり、とてもものに神達今少し御念を  
入れさせ給ひ、大家には内儀の晝寝、小家には嬬が鍋釜を打ち割る夫婦いさかひ  
の無きやうに結び給へかし。さりととはく男女の不あひなるほど見苦しき物はな  
し。夫妻の中の良きは先づ見よげにして其家齊ひ、富貴なれる第一なり。爰に泉  
州堺は千代の松原萬歳の浦浪靜に、人の住みなしも表向よりは内證奥深にして、  
京に優れる樂人あり。是みな唐へ投げ銀して時代儲の分限、仕たい事して遊ばぬ  
は一生の損なり。虎屋の何がしといへる人、所の女郎狂ひをかしからすと、大阪  
の色町に通ひ、三里を毎日の早駕籠、人も咎むる四枚肩、乗掛かつたる太夫の三  
舟に逢ひ初め、沖を漕いだる大騒ぎ、その頃は南北に此大臣に續き、眞似もする



人なく、鸚鵡の吉も都を捨て、御機嫌取に下れば、難波の末社、座摩の前の椀箱  
と言へる者も、朝暮上臺所まで相談、分里よりの番付の封じ文もつて開いて御取  
次、誰か恐るゝ人もなく、越後町の男もりをんに内へ呼び入れ、太儀といふ聲の  
下より、左庖丁が沖脰、ちりめん小鮎の煎物、うしほ煮の魚は所からに前とて新  
しく、出来合食のもてなし、一つなる口とて大和屋のとつて置き酒をすゝめ、住  
吉の茶の錢にとて、たびくゝに定まつて、二百づゝ給はれば、近き高麗橋の古手  
大臣への急ぎの分狀は捨置き、遠き所の御使、我も人も競あひて、太夫様の御文  
しばしも壁にさし置く事なし、是は何故ぞかし。ほしき物は銀なりと、吉田の兼  
好法師が人には見せぬ家の集に書けるも、是ばかりはよふいふた、口も鼻もなき  
小判が物いふ浮世には成りける。此大臣は近代の帥なるに、しかも内儀心ざし通  
り者、ならびなき賢女なり。其美京島原中頃の吉野に比べて二割半ほどよくて、  
而も音曲又は手妻の拍子利きにて、殊更一節切よせりの名人、蟬の時雨、鹿の草枕など  
いへる一手を吹き出し、きゝ人は是になづみぬ。不斷の風俗當の女に替りて、女の

まゝ成る事ぞかし。わざと羽織を仕立、男の好ける有様、大方の町人はなるまじ  
き事なり。此女房姿といひ、氣分といひ、萬を花奢で固めし身なれば、是を我宿  
の眺め、酒の相手にして、同じ炬燵にあたりて、髪切したる女童に、足の裏をい  
らはせ、夫婦寝ながら名所香を聞きて、富士淺間室の八島、煙さまぐ袖にとま  
りて、是は堺の伽羅大臣とも云ふなるべし。此人の親仁いかなる富貴の種を蒔き  
置きて、今子の代に銀の成る木の山なして、利銀請取針口の音、賤き物乍ら貧家  
に鼓の音を聞て面白がらず、此宿大節季に掛帳を提げたる者一人も見えず、萬事  
霜月の初めに正月の來て、門松立たぬ許り也。此暮しにて美なる女房を持つて、  
此諸果報もろなれば、何か外には願ひ有るまじき事なるに、此上の女郎狂ひ、兎角は  
奢の沙汰に極まれり。其頃お敵と言ひしは佐渡島屋の高間、丹波屋の井筒、随分  
いやと言はれぬ賣物姿なれど、かのお内儀に見較べては、同じ色ながら、山吹と  
菜種程の違ひあり。是をさし置き、新町通ひ、内儀はせかるゝ風情もなく、男作  
りて内を出し、留守には其身を堅めて、女ばかりを集めて、書物に氣を移し、夜



明方お歸りを淋しく待つて、機嫌よく今宵のお首尾いかゞと心よき物語、餘りに結構過ぎて見えける。是を思ふに、女郎狂ひは格別なる面白き所あると知られたり。惜や此内儀限りありて、二十四の年浮世の夢、亭主も一年のうちに空しうなりぬ。一子も無ければ筋目ある人に跡は渡りぬ。一生さかえて榮花は其身の樂しみと言へり。此人も長生せられて、女郎を買ひつゞけなば、後には家名も残らずひよんなものに衰へて、臺唐臼を踏むべくも世は知れぬものなり。此大臣は死時財寶満足に残りて、跡とりの仕合なり。是は自然と焼止まりたる伽羅の枕物語ぞかし。

## 二 煙に替る姿大臣

古文眞寶に、かまへて孔子の顔つきして、此徳を五百石の米になし、大名の御前に相勤め、よろづ物堅き人の一子、十九にて法體致させ、京都へ學問に上せけるに、書物を調へるため、又は内證の事ども入用とて、金子二百兩渡したまへば、

母親袖の下より一分百賜はり、吉日に武州を旅立ち、定まりの道中、十一日目に京着して、先づ三條の橋詰に宿借りて、洛中の寺社諸山の舊跡を眺め残さず、さて島原の手引に花咲左吉といへるいたり末社を連れて、これ旦那よいとをかかしげなる仕出しの手つき、酒も面白く吞れて、柏屋妙庵所は南の端、さし入る月も餘の揚屋よりは何とやら星まで大粒に見えて、思ひなしにて遊び良く、是にてかんばやしの薫を定め、投節の聲を賣、太鼓女郎土佐などませて、つゞきは宿の繁昌、晝の枕夜の騒ぎ、戀と情と口舌と機嫌と一度にとりませ、丹波口より野道を過ぎ、頃は八月十四日待宵の暮を急ぎて、そもく東の一方口、初學徳に入門を越えて、あしたに道を聞く朱雀しゅじやかの野を歸らうとも思はず、京に親のない身の一樂、色系弾かせて歌ふて、死なざ止むまいの唱歌、合點じや左吉、なんでもよい事して來いな、こゝが命の捨て所、いかなく出でぬと、長遊びを自慢の折節、旅宿の近所が火事といふ。都の煙も面白い、亭主に預けし萬籠二つ、焼いたら灰になるまでよ、人の嘆き我身の遊興、世はさまざまの心。大臣宿の不首尾を氣づ



かひ、床より飛出、かねて手あひの早駕籠、卸が働きの時なり。或は女郎出口に送り、紙入下げ物脇差に氣をつくれば、噂町の茶屋が才覺、たんほにあつがんの酒を急ぎ、お供の者どもに吞ませ、野の秋風を凌がせける。この時の小半酒、明日は一分に成る事ぞかし。大方はさらばといふ聲もなく立ち行くは、是ぞ飽かぬ別れと眺めしに、女郎ども、思ひ／＼に手を清め、是より西にあたつて高き天狗山を祈り、我大臣此火難免れ給へと拜む、その風情こればかりには微塵も偽はあらし。その中にも見舞状など書くもあり、島原は女島となつて、戀の抓み取、我ばかり残つてこれにもやめず、打ち撥の音、いかにそれ宿なればとて、此折柄は奢りなり。漸く曉方に煙も薄くなりて、人皆立ち歸り、今宵の費も凡そ中つものに二萬貫目餘と言へり。慾ながらその銀欲しや、太夫達の氣の盡きぬやうに、つけ届けする物をと思ひぬ。兼好が時の間の焼にもなりなんと書けるも悪うは聞かぬぞ、身の用心の傾城買も、すがらぬ中に分別すべし。夜も明けて無事の家からは禮状、末社はよい次手ついでなるに、焼ぬ家を嘆きぬ。何れ奉加も仔細なしには成

難しと大笑ひせし所へ、昨日の夜半迄は、高橋、大臣様と崇めて、世に又もなき分知り太夫も、此客一人にて外へは年中の物目を頼まず勤められしに、内藏一つも残らず、夜前爰を歸らせ給ふ姿のまゝ、すぐに黒谷の旦那寺へ先退かせられ、早御一門中の御相談にて、丹波奥の新田に行き給へば、ゆるりと四五人は暮さるゝ所と身體爰に極まりぬ。其里生鯛鱸の形ちを年に一度も見ぬ所なれば、まして太夫杯の顔は、若し夢には見る事も有るべきか、都を立ち行く名残に、荷付馬丹波口に待たせ、夕に替る百姓姿、遂に召し馴れぬ木綿縞の袷に、花色染に、三層小紋の羽織、菅笠に繩緒をつけて、鬢のそゝけをかまはず、されば人間は形も心も違はずして、きのふの衣裳とけふ見較べて、かくもまた替る物かな、此身の耻を構はず、先夜の煙を因果と思へば、更に恨むべき事もなく、長き名残に走り寄り、高橋に逢ふより、二人は四つの袖を絞り、命あらば又見参らす事有るべし、先は浮世の限りぞかし。扱妙庵へ申、九月の節句の事幾秋か我等勤めしが、此仕合なれば外へさし替へ、首尾する事を頼むなり、そればかりの心が、りにて、寄



りけるはと、太夫様のお身の爲め仰せられしに、是を聞く下々迄涙に庭は草履は  
かれず、惜や此里の花を丹波の百姓になしけるぞ、さりとは／＼夜前火を出した  
る奴は、太夫さまの爲めには敵といふ者なり。悪やと思ふに是非なく、何れも出  
口の門に送るに、前後を見合せ、高橋袂より何やら其人の袖に通はせける。目の  
早き者が見しに、小判なら十四五兩のかさなり。大臣此節なれば心ざし先づ申請  
ると立別れ、何時も東へ行くを今は西の方へ馬を引せ、惣泣にさらば／＼と言へ  
るは定めなきの世や。禿の金彌何のわきまもなく、是丹波の百姓様、お里から  
便りに、是程ある粟を下さりませいと鏡團にて招けど、早姿も見えずなりにき。  
其外大臣の難儀、女郎の迷惑、四五日は世間を思はれて、此里へも遠慮と見えて  
小歌も文作も聲絶えける。彼武州の大臣一人は是にも構はず、八月十四日より九  
月十七日迄三十四日が間、柏屋の門にも出ず、色遊び今といふ今退窟して、此所  
を廢めて又東川原の野郎作吉つくよしに戯れ、晝夜十六日、其外茶屋風呂屋又は手かけ物  
白人舞子探し、絲屋扇屋、都にある程の女を詮索して、百七十三日續けて慰みさ

ま／＼替て、今は外なく得道して、それより伊藤源吉門下に成て、學寮を出ぬ事  
三年なり。何か心の移り行く事なく、一筋に道を聞て程なく物知り自慢して、身  
を修めて江戸に歸り、親仁の跡を廿六歳より請取、仔細なく勤めける。若さうち  
に我心と此道を止まりしは此大臣ばかりと言へり。

### 三 情に國を忘れ大臣

庚申の日天王寺に參詣せしに、折ふし冬の初め、難波女かの仕出しも昔に替り、加  
賀笠のうしろつき、御所染のかづきなど、は格別姿をくろむる所なく、中々居腰  
にならひありと言へり。形は兎もあれ近年のよさ、下女までも堪忍なる程にたし  
なみける。人の内儀娘も見られ自慢して、男の事も親の事も忘れて、大臣めきた  
る風俗に近寄、褻蹴返して隠し裏を見するなど、是皆素人女のする事なり。少し  
思ひつけば、大分いやな事のあらはるゝゆるゑ、惜き銀つかふて女郎狂ひはするぞ  
かし。裾を悲しみ、襟の上ぐるゝに氣を付て、無理に首をかゞむるなど、さりど



は心苦しき事にぞ有りける。見れば善悪の沙汰もむつかし、兎角は無色の脇道行  
けと、生玉の並松筋より横ぎれに、里の家つゞきの鹽町を行くに、是はなんとも  
ならぬ美形、人に見られたき風情もなく、成程構はぬ歩みぶり、なほかれが目に  
止まりぬ。肌はに白繻子、袋縫ひの小袖着て、中に紫鹿子の兩面、上に紬の淺黄染  
に、共糸の縫紋、炬燵はに房付枕二つ並べたる、悪い程しほらし。龍門中幅帯、素  
足に藁草履のいたりせんさく、各々きよつとして五六人の供女を見れば、大阪の  
風儀あり。茶辨常持たる男に、京衆かと問はせければ、何と美しき者ではない  
かと言ふて、肩もかへずに急ぎぬ。さても小面悪い返事やと、跡を慕ひ行くに、  
其女見れば此謎解けゝる。美いこそ道理なれ、藤屋の金吾、地女一萬人の中にも  
是はある物か、けふの徳は是ぞかし。此女郎は讃岐の天狗が抓みたるやうにも風  
聞、京の太郎坊が掴みしやうにも沙汰いたせしが、美作の大臣が掴みて、天満に  
置きけると知られたり。兎にも角にも此女の身の上、福徳の百年目、よき仕合せ  
なり。是を思ふに、吉田は優りて魔しきに、何とて出兼けるぞ、日本國の末社方

の如く取持けるに、年の明るまで此女郎に勤めさせ給ふは、貧乏神の仕業なるべ  
し。昔は松など根引する事稀なりしに、近代は年の内に請出さぬといふ事なし。  
惣じて女郎を引き抜き、妻の如く宿に置きて、始末らしき算用を聞かせ、又勤め  
のうち逢ふたる男に顔見合せ、彼是心の善からぬ事斗なり。兎角下屋敷に置  
物、折々通ひ女にしてこそ色里の思はく一入慰みにもなりぬ、毎日四十六夕が物  
ぞかし。宿に置くは地女の少し風儀の良き分也。惟ふに遊女は貧乏公家に同じ、  
装束して仔細らしく座に付、和歌の沙汰する時は是外の人間也。萬事脱ぎ捨て、  
常の姿は色の小白き膏藥賣かに異なる事なし。殊更太夫は九軒の西格子に並べて、酒  
はごこの井戸から汲んでと、世の事知らぬ顔つきにて賤しからず。殊に金吾情あ  
るやうに見えて、男いくたりか思ひつき、太夫三四年に人をあらそひ我を忘れ、  
身體棒にふつて饅頭屋を爲る大臣もあり。上問屋は唐弓打ちと成られ、武士は此  
君ゆる浪人して土人形の彩色して、高津の邊に住めるもあり。盛んな時とは人程  
賤くなれるはなし。この大臣とも日頃は請出す沙汰せしに、何れも望み絶えてさ



もなき田舎人によい事せられける。其頃天満に大臣ありしが、金吾と口舌仕舞に分別仕替へて、鹽屋十五にあひけるが、今に揚屋の門を晝通りける。

#### 四 目前に裸大臣

情の海、宮島の色町は都を大方に移して、女郎もさのみ賤からず、一座しみとくと思むぞならば爰ぞかし。何國も此里の仕掛替る事なし。盃を押へるといへば、こなたさまは大平あふへいな事をと、何れの傾城も定つて言へり。所言葉ながら、是程合點の行かぬ挨拶はなし。廣島の大員ごもも、晝は世間に憚る事最一國の下ぞかし。江戸京大阪の町人誰恐るゝともなく、自由なる大騒を見てこそせちなれ、爰程の事又外になし。それとくの樂み、日暮て密に浦傳ひ早船を借切り古里の所横渡しに、切火繩一寸立たぬうちに、かの町に着きて、ざつと遊びて時取をして、又立ち歸る浪の上、さも忙しき忍路、或は親がりの人は、四ツの鐘過迄も内の首尾して、夜半に通ひ着き、八ッ過に歸れば何事もたゞ一時の樂み、枕に夢を結べる

事もなく、盃左に、右に烟管、長い小唄は笑ふて白けざし、口舌を其儘中直し、膳出せば、床を取り面白ふ添寝すれ。お歸りの時節と呼び立つる、捨る銀とは是なるべし。西國にも物惜みせぬ大臣あり、随分つとめて戀を奢て、これかれと名をさゝれて、見事な捌きごもせしうちに、肥後の熊本米買ひ上りしが、その初心さをかしさ、今を取出の大臣の下地と見えしが、明暮つゞけて此所の第一定家と言へるを我物にして、所のなじみに逢はせねば、流石田舎めきて、是にせきて張合しに、日和にかまはず一分小判を氣味よく降らせければ、傘の與右門といふ木鼓持までも一つに成、はや取出す談合募りて、これに楯衝く人なく、いやながら女郎も此人任せになつて、外は次第に薄く、なんといとしがりぬるは分別して見る時は少しも悪からず、賣物に拵へ置きたる女なれば、其時の相場のよき人に思ひ付事、商ひ上手といふ物なり。無用の買置と思へど、其人の胸算あればなり。京の野秋を仙臺大臣國より六年勤めし事もあり、是は目前の樂みしても惜しからじ、人の嬉がる物をやる程面白き物はなし。此大臣揚屋の座敷狭きとて、作事の



差圖してよき事言ひ、五貫目ばかりでしまふやうにと太鼓に申渡す時、亭主いはれざる欲心、まだ勝手は是でも堪忍頃なれば、逆も御合力にあづかるならば、身過のたよりと成る事あり、此程問屋倒れて賣舟あり、是を持っては、末々人の御機嫌取らいでも、夫婦樂々と世を渡れば、一代御恩は忘れじ、今少しの事七貫五百目迄は買人あり、八貫目には成る事といふ。それこそ汝が望み次第、聞合て参れとあれば、あるじ喜び、出す吸物段々申付て、彼問屋へ行。さりとて遠國正直見えたる、先貫はぬといふ事手ぬるし。變り易きは人心、それはくゝあんな所の取やう、上方の利發を見せたとし、末社の與右衛門無常觀じける。其後何やら女郎を疑ひ出して、大臣むつかしき顔つきすれば、定家心に悲しく、此男取放しては此程言ひかはせし事ども空うなるを迷惑がり、血を絞りて外に思ふ人はなきとの誓紙書に、是でも合點をせねば、大臣の脇差抜きて、小指を切つて投げ出せば、何れも一度に涙をこぼし、此上は申分ないぞ、請出して我等がお内儀さまと言はすと女郎に安堵させける所へ、四五人断りなしに座敷へ驅け入、中にも六十ばか

りの親仁、彼大臣が胸倉取つて、さてくゝおのれは胸より胸の大き奴かな、親方の金銀大分預り買といふ、米は買はずして女郎は誰が銀にて買ひけるぞ、跡先知らすのとうとく奴、刻んでも銀になる事にはあらず、是より直に追拂へと、残りし勘定して手許に有し彼袋をひつ立て、着る物羽織丸裸にして、廣嶋の問屋に恨みを言ひ、各々肥後に歸られける。裸大臣其座にたまりかね、行方知らず出て行きぬ。不憫は此女郎始めて指の切り損に成りぬ。亭主が舟も此浦浪の泡と消えける。

## 五 菊紅葉鉢の木大臣

何かな珍らしき事もと冬の日の淋しさを暮しかね、花のお江戸は上野の櫻咲く頃を待久しく、久離切られし身の悲しさは、新橋の邊に、隠家雨露に濡れざるは、少ししるべの人、情ある故ぞかし。此主人も若い時は京にて八文字と言へる男、中頃の花崎大臣なるが、七年餘りの奢に斯く成果て、爰に下りて都の内儀は吳服



所の息女なるが、是を置去にして、哀れや其人は此人を思ひ死せられし。世帯持からなうてもならぬ物とて、又爰にては屋敷のはしたを何かなしに呼び入れて、つゝ六太郎を産ませける。やうく名所煙草の刻み賣、赤土は江戸の名物、石火矢は盾もたまらぬといふ心にて、才覺らしき名も面白し。煙その日暮しに立て、突米の當座、扣き納豆、あさりの抜き身居ながら調へて、自由なる住家なり。明暮子守して内儀の機嫌を取り、商もせぬ内を喰べ費すも氣の毒なり。商賣に元手なく、思案を出し、菅笠の上に人形を仕掛け、顔付にて遣ふ事を新しく、拍子せはしく、心から浮き出づれば、をかしさ是に氣を移して、兩袖に餘れる程の錢になる事、恥捨てこそ身過なれと、少し所を見立て、三野にかゝり、先づ揚屋町を囃し行くに、女郎は目もかけず、禿ども指さして、さても笠人形の下手を見よと笑ひける。少しやると思ひ、自慢心はよはくと成りけるは、勸進一錢もなかりき。是は不思議と思ひ、清十郎とやらいへる揚屋の棚下に立ち寄りて、しばし足を休めるうちに、唐物屋十右、淺草武介、其外の太鼓持、思ひくしの仕出しにて

笠人形を使ふを見しに、それはく萬を鍊磨の男共氣を付て働さけるは、元來は我が真似ながら、早四五日の中に是を移され、面白男どもにして取られ、是非となく立ち歸るに、せめては次手に此里をこまかに見て成とも、戻り足に三浦の格子を立ち覗けば、あまた女郎暮歸りの身拵、何れか鏡が耻ぢぬべしと見渡せば、花は白菊、やしほ紅葉の箱植、是かよ高尾ゆかりの一木ならんと詠め、此菊紅葉欲しやと言へば、かせ山立ち出で、何より易しと切取て、其ま、捨置きけるを、外にも見し大臣氣のしやんとしたる所を悪まず、格子の隙間よりそれへ渡すも由なし。切捨てるからは、心は遣りましたと言へば、此男感じて、昔ならば此君をけふ請出す物をと、氣をもだくとして別れぬ。女郎その梢を惜み、この木この花は幾人か御所望もありしに、故もなき人にと言へば、よろしき人には遣らでも苦しからじ、殊更袖乞の身として言ひ掛けしは、たゞ人の成れる果てとは思はれずと言ひ終りぬ。其後此男、京より姨の最期に呼び上し財寶貳千貫目を譲られ、百ヶ日迄弔ひて、二度武州に下り、三野もすがりの折ふし、ばつとしたるよね狂



ひ、清十郎大座敷にて、かしらから三十日の約束、京の末社、江戸の大鼓入亂れの酒の上に、過し秋格子に立ちしものなるが、我を見知り給ふか、いでその時の白菊は、梧のとふに替へて、小判貳百兩、紅葉はもみにうつりて五十疋、真綿取添へ下されける。女郎の孫々に至るまで、こんな事はあやかり物ぞかし。

多岐路を極  
多岐路を極  
多岐路を極

# 好色盛衰記

一名「西鶴榮花咄」

## 卷五

### 目録

#### 一 後家にかゝつて仕合大臣

思ひの外なる忍び路の橋

心の曇る月待山伏の事

#### 二 當流帥仕立の大臣

宿の張札に名の立

女郎買極意指南の事

#### 三 皆吹きあぐる風呂屋大臣

残るものは太夫の風俗

灸の蓋より身を崩す事



四 形にかまはぬ欲大臣

遣手に人の知らぬ小判  
闇がりの契りも晝に成る事

五色に焼かれて煙大臣

八十餘歳のうかれ男  
財寶は養子の物に成る事

好色盛衰記 卷五

一 後家にかゝつて仕合大臣

親の身として久離を切る事大方ならず、昔は丹波越とて京都を離れしが、是も古  
くなつて近年は江戸へと下りけるに、當所なしにも、請人屋あつて命をつなぎ  
ぬ。又江戸の町人大臣三野の小西に戯れ過し、勘當せられて京に追ひのぼされ、  
鳥丸の邊にしるべあつて、商ひは假令けいりやうにして、明暮男自慢、何れ女も好すける風俗、  
随分昔を捨てざりしが、此男世渡りを知らねば、次第に内證淋しく、武州出でし  
時母の方より品川迄人追驅けさせ、金子三十兩給りしを、半年餘りに無くなして  
けふまでは暮せしが、明日の身の上悲しく、今といふ今喰はねば、ひだるきこと  
を覚え、絞紙の煙草入、百を拾八文の縫賃、心細き糸仕事、是も命のつり緒と思  
ひ、都もうたててく、東の方ゆかしく、獨寢夜の物淋しに、前後盗みたる金銀勘定



して見るに、小判貳百兩、銀拾九貫目餘なり。随分心任せに蒔捨けるよき種子ながら、いつの世には生ゆべしと思へば、惜しき事と念點してから、遅しといふて是非もなき今なり。何を嘆くぞ川柳、跡の事は水になして、さらり流して仕舞ける。其南隣に花橋に劣らぬ程の酒屋ありしが、此亭主若死、何故なれば内儀の美しさ、長崎の人に請られし野風に取違へる程なり。此女に二つになる娘の行末を思ひやりて、若盛に後家立て濟まして身を堅めけるを、今のいたづらの世にくらべて、此人女の鑑と言へり、ある時此後家本國寺の末寺何坊とかやにひそかに參詣して、住僧に初めて對面して語りけるは、烏丸のそこなる、江戸元結屋の亭主は、こなた様の旦那と承りまして御座る、それにつきまして御内意迄申上て、其人に御意見頼みましたき事あり、私は後家ながら、浮世の事は捨てし身なるに、執心の通はせ文數々送られけれども、返り事するまでではなく打ち捨てしに、又この程は人の見るをも構はず、書て送られしはさても恐ろし。裏より梯子を掛け、櫛の木の植込を目的に忍ぶべし。其下は雪隠の屋根なれば、塀より是に下りて、

戸さんを踏まへて、立石の上にもたげ下りて、書院の先へ通ひ行くなり。雨戸を少し開け置き給へ、さもなきに於ては、同じ一夜の命と思ひつめられし事世上へ聞えては、其人の一命あぶなし、私は後家の身にて、咎むる男もなければこそ外へかやうの事を申されぬがよし、是非此たびの事頼み奉る、人間二人助させ給ふに同じ、重ねては必ず文をも給はらぬ様にと、言葉を殘して歸られける。其後彼元結屋が方へ人を使はし、早々寺へ呼び寄せ、老僧初めの概畧を語り、そなたの旅と言ひ、京に親類とてもなく、この度不首尾あつては身の立所なし、此事においては、かまへて思ひ止まれよと、苦々しき顔つきにて手強く意見し給へば、此男氣色變つて、是は思ひも寄らぬ難題、少しも身に覺えなき事なり。御耳へ入たるは誰にもせよ、相手生ては置かじと進むを、御坊少しも驚き給はず、身ぬけのならぬ證據あり、其方書付てやられし忍びやう、段々是へ後家まゐられ、面談にての斷りなるが、まだ是にても諍ひ給ふかとのたまへば、此男江戸磨きの紳なれば分別して、是には様子有るべし、此方覺えはなけれども、其後家爰



に來りて、我身の事言へるはいかにしてもうまい所有りと、能々思案して、私若氣故、人に難儀申掛しが、御意見の通りに此儀思ひとどまる由申せば、住持満足せられて、何事も穩密に立ち歸り、其夜の更け行くを待ちかね、女の差圖せし癖に乗れば、自由に忍び道を付置き、これは面白し、こんな所は跡先の思はく見返らず、木蔭に立ち忍べば、後家手を取て引入る、夢かと疑はれて行くに、宵から寢ぬくもりし重ね蒲團留木の薰り深く、やはらかなる枕一つ、身もちとむばかりに恐ろしく嬉しく、しばしはさまくの物思ひせしが、高が孫家にはまぎれなしなんの恐るゝ事なしと、三年餘りの思出をさせければ、此女現ぬかして、うき世の浮名をかまはず、是よりたびゝ忍び合して馴染重なり、後家の袖下から何にも成る物大分貰ひて、身体京都に極め、絹商賣して有けるが、此後家もうるさくなりて、又西島に通ひ、左門と言へるに氣を盡し、情の重なるうちに帥が身喰とや、都に隠れなき兩替の何がしとはりあひ、半年立たぬ内に、せつかく後家たらしたる物皆になして、又始めより淺ましく成行きて、この大臣を今見れば、伏見

もすゝめ甲子と云ふ入れば  
 こはけ、以何れ、産片のあらて  
 ければ、こはくも、静も、何  
 (三内、二、三、入りにければ)

の豊後橋にて山伏姿となつて、月待日待御一代の吉事御判はんじける看板出せしが、我が身の上は何と見るぞかし。

## 二 當流帥仕立の大臣

洒落仲間とて寄合所を、浮世小路のその南側に拵へける。露地の入口に香具賣あつて、柱に張紙見えける。何の所作も聞かずに、八右衛門宿とばかり曲者なり、身過こそ多けれ、女郎買の帥に成るやうを指南するとかや。さても世は廣し、さかやきをそりさげて、八寸袖口の大官仕立の衣裳を着る男ども是を習ひ集るは、畢竟女郎の仕合ぞかし。されど音曲にも一聲二節と申なり、色里通ひもその通り一金二男と申、銀があるか大臣振がよいか、何れにても此二つの中其身に備らずして、よねの來るものではなし、第一金子なり、わけていふ事も古し。ある男此道に染まりて、紫の色介と言へる人、さてもしほらしく生れ付、強からず弱からず、手にする事口拍子何に一つ疎からず、密夫狂ひ古今の開山一遍上人と名に立



ち、天職から太夫残らずよい事をしてとりけるを、さてもあやかり物、盗みあひの女郎程面白き又外に無しと言へば、何卒大臣になりかはつて、女郎を人に盗まれて、遊ぶ身に成たきと言へり、思へば尤なり。銀借りて濟まさぬ心と、借損しても痛まぬ程の違ひあり。盗みて中戸の苦しみより、うつけになりて床取らしてともし火で顔見て、腹の上にも喉かはくを堪忍せず、禿に運ばせて茶を呑む自由こそ心よけれ。何とぞ才覺して分限になつて、大臣と言はるゝ名代にて騒ぐべし。延寶年中までは、女郎も勤めに世話なく、何れの太夫天職も根強き男を頼みに、自ら張強く、まだるき客は飛ばしてのけて、したい事すれども、浮名は立ちながら、三十日ながら賣詰ければ、親方のまゝにもならず、遣手が見るをも憚ならず、密夫をせぬ女郎は一人もなかりき。今の淋しさ歴々の女郎庚申の夜、内に居て、内儀の當言いふも聞か猿の稗もんだる様なる顔つきして、世間の義理を缺きて、うごくと成次第に暮しぬ。油火も費と、闇がりに追込まれて、煎じ茶香みたきにも遠慮して、自ら肩身すぼりて、密夫狂ひ杯する心ざし思ひも寄らず。

然れば女郎も手管する程の時ぞ此町の繁昌なり。扱も欲しきは銀なり、今此自由にまはり、初對面から帯を解き、西枕に成とも、東向に成とも、又逆床にのぞまれても、久しく逢ひ馴し男のやうに身を恥る事もなく、其人任せになつて、太く逞ましき手して、

心の儘に遣はれ、是さへ

いやなに、むさくさ延びたる髭を齒で喰はへて脱けといふ、さりとは小面悪し。最早言ふて退けて、逢はぬ昔と思へども、霜先の男何とぞつなぎ置かば、正月の遣ひ物になる事もと跡先の思案して、うつくしう勤めける。是を思ふに、女郎の弱き所を見付、自由成る事を言ひかゝりぬ。強き時には自然と男の方より機嫌取るものなり。時節わるうなり、偽りは我ながら耻かしけれども、大方の男、それをも好かば、作り聲して泣て聞かせ



かすかなる聲して湯を吞ませといふ。是まで皆床の偽なれども、是々好かぬ男はなく、心面白く思ふから、又出来して取かゝる。私はたはひがござりませぬと現のやうに仕掛くれども、隙入てこなさるゝ程に自然とうるほひ、とめどのない程取亂して、偽のならぬ誠になつて、思はぬ男にも嬉しき事あり、勤めのうちは人にこそ言はね、思はくの外なる事どもなれど、なじめば男も一生の女房の如く思ひて、何事も闇がりにて濟ませばこそ、浮名も立たざりし。是も不首尾になつて、逢ふ事絶えぬれば、男は用捨なく、流れの身の悲しさは、早人中にて此沙汰して、肌が悪い事の、廣いの、胴間たむきが短い、第一嫌ひじやの、口中が嗅いの、又は物ほしがるの、物喰ふのとの悪口、女郎なればとて喰はずに何で命が有るものぞ、知れてある事を言ふ人は、未だ素い大臣と、年明て禮奉公分の女郎の語りぬ。かゝる仕掛けの内證を聞くからは、深うは溺れまじき事なれども、出かけて止まり難きは此道なり。各々も分別したまひ、未だ知られぬうちに、色町廢める

が本帥のつめひらさきの大事を相傳するに、それは／＼手の見えぬ遺縁、未だ取出しから賢く、朝に道を聞て夕に末社も連れず、遣はぬ先から半帥になつて、同じ捨る銀も譯よく捌きける。されども爰にゆかぬ事有、遺縁は中ぐゝりにして、女郎の氣をつかさず、萬談合男になつても、物つかはずにはいつとなくふづまりなり。此口傳習ひたしと、かの指南する人に尋ねければ、其遣はずに、我等がやうに分知りになり給へ、それはそも／＼より一座の仕掛け、揚屋へによつと入るから格別と、そこを教へ給へと、是非に稽古の爲め逆、無理に新町へ同道せしに、其宿も差合、此揚屋もいやとて身を縮められしは、日比人の指南し給ふが少し後れて見えけると、段々詮議して外より様子を聞けば、三十九軒の揚屋に、たれちらかさぬは一軒となし、遣ひ果して今此身になつて分知りなりぬ。各々合點して此帥匠をあげて銀遣ふからは、人の教は聞く迄もなしと、大臣仲間に申合せぬ。なが／＼とつまらぬ言ひ分、詰る所は銀。



### 三 皆吹きあぐる風呂屋大臣

月代剃て茶筌髪、三つ着る物ひとつ前、少し目立大臣に誘はれて、姉が小路の和泉風呂へ入相の頃より行きて、吹てふかれてさつと揚り場に座して、ひじりなんどの光に移して、喰さき紙を拵へ、女郎衆炙の蓋一つ頼むと言へど、聞かぬ何國にもある事なり。手はまはらず、少し氣の毒なるに、中にも年を重ねし女の、後ろから肩にさはりて、炙は此お二つばかりかと懇に蓋して煙は絶えて、跡のいとしやと、一つ二つ三つ悪からぬ手して打ちける。是はと顔を見れば、やあくなんともならぬ仕出し、こなた誰に問ふて、投げ嶋田の髪の結振と、言ひさまに小褌をひけば、それにこしらへたる女、いやとは申さぬと言ひ捨て逃げて行く。これをつけ込にして、先約無いこそ幸なれ。今宵は太夫に待たせたもをかしかるべしと、同じ心の友遊び、皆でなんぼが物ぞありたけ出せと、二階に揚れば、丸行灯、煙草盆、菓子、盃をだん／＼に、又氣が更りて面白しと、闇がりから外の

人の見しをも忘れて、上調子の投節、色まじりの小唄、是よりは無し。何れの時かよい事を歌ひ出しける。彼女おつとつての撥者、合の手のよい程歌は消えて、三味線ばかり残り。始めはざつと酒呑捨て歸るに思ひしが、此女のひとつ／＼しほらしき事見えて、大方のことは氣に入らざる大臣をなづませける。昔はいかなる流れと尋ねけるに、神ぞいたづらにはあらず、親の爲めばかりに、小さいさ時より風呂屋の勤と語る

もつて氣の毒、是はどうじやと言へば、いかにさもしき我なればとて、定まるしかけあるに、かしらから自由遊ばすはむごし。一たんは風呂屋勤め分に、方様のまゝに成りました、その上はわたくしの身なれば、分立てさす事思ひも寄らずといふ。さても替つて強し、遂に島原に是程の女はなし、いかにも此方のあやまりと口説うちにも



なれば、一代せぬ事兩の手を合せて拜み、さまざまの詫言しけるに、此床のうまさ、是はなんともならず、深きたはぶれと成り、此女のゆかりをひそかに尋ねしに、大阪に勤めしふじ屋の太夫葛城がすがりといふ。名の木は今も格別なり。昔を隠し身を卑しく言へるは、流石太夫職の心ざしとめつきりとかはゆく成て、中頃の野風餘所吹かして、是にあけくれほだされて、わけもなふ奢つて、人こそ知らね銀の捨所、太夫狂ひには別の事もなき身体を、思ひの外なる磯にて舟をそこなひ、きのふに變る心川、世渡りもをかしげに、次第くに見苦しう、包む世間尾が見えて、稻荷の前つぼくかまく作り賣、是も土佛の水遊び、身は何時となくいな人に成られぬ。

#### 四 形にかまはぬ欲大臣

性あれば食あり、何國にても女に事缺く所なし。今武藏野の廣き、末々まで人家に立ち續きて、諸國の武士町人爰に入り込みて、何れを見るにも男世帯にして高

野の如し。年長けたる大前髪の草履取、是を見るより外なし。或時妻なし男二三人吉原に行きて、商人心のせちかしこく、此里の女郎、高下に限らず、十露盤入て惣高を聞くに、六百四十三人あり、さりとはすくなし。せめて五千か七千はあるべき物ぞ、武家筋の人数つもりては、男五百人に女一人當にも成り難し。さらば此女郎が間もなく時花かと思へば、太夫格子にも隙あり、まして散茶は三十人四十人も居並びて、約束なしの男待顔に見えける。末々端局の女郎淋しや、ひとり手枕して客を見るに笑ひ作りて戀を仕掛ける事、上方に少しも替る所なし。さもあればこそ、爰にも通町に六味地黄丸の賣る事大分なり。數百萬人の男、濡なしに暮したるは一人もなく、女の肌に添寝不思議に相手のある事ぞかし。江戸見ぬさきには、女といふものは八朔頃の松茸、寒の中の眞鯨の如く、下々の口には入るまじきと思ひしに、何時成とも銀と隙との二つに極る所は、遊女町の面白やと語れば、腰掛茶屋の嬪が、始めよりの事とも聞き耳立て、各々の御沙汰珍しからず、此七年跡に都より遊興法師の下り給ひ、其僉議は濟みたる事ぞと、少し分



自慢の咄の先を、折節やりてと看板打つたる姿、足音ばたつきて其門を通るに、跡より知行から此頃取られたらしき、中間が封じ文出して、此上書一つお目借りましよと言へば、物讀そうな女房じやと思やるか、文の讀み書きは女郎の役、遣手は傾城に我儘をさせぬと、客が偽いふを耻かゝする役じや、大方人を見てそんな事は頼みやれと、無理作りたる顔つきの女なり。この中間赤面して、未だはじめてのお使なれば、爰の御作法も存せぬなり、御免と言ひて通りける。さてもにくくしき心だて、あの女にまはさるゝ女郎いとしやと言へば、茶屋も今の有様に呆れて、あれは而も歴々の太夫様につきしが、此里の戀と情と花奢と洒落とをまろめし中にも、あんないかずもありける。そもく此所にて出生し、二才の時酒湯掛りてから、あの恐ろしき顔容、女は女にて一生男のふんどしに身をさへたる事もなしとや、何れも最前の算用の外に、これらは格別の違ひ、是程多き男の中に、生れながらの後家立つるもをかしやと言へば、皆々横手を打ちける。是より氣を付て見しに、あれは悪女ゆゑなり。美女にて屋敷方の奥奉公人限りもな

⑤  
新選四鶴全集  
九六





く、その不自由さ思ひやられし。振分髪の時より二十四五、三十二三まで御前を勤めて、小氣味のよき事は見ながらに、生きた男の太股をいらはず、明暮そのみ忘れもやらず、京の人置を恨み、思ひ死する人かすくなり。勤めは男に迷惑するもあるに、是が叶はぬ浮世ぞかし。彼遣手に男持たせたきと言ひ出せば、是は一興とふすくり出し、中間づかひの小者に金螺かいらの徳藏と言へるに語りて、形に替て、分け知りの女とすゝめ、つる縁組をすましける。此女四十七までこんな目に會はずして、始めて下紐解く事三千年に一度の花咲く心地、それより後は互ひの相談にて、ともし火なしに臥しけるが、此男かはゆさのあまり、一代貰ひ溜めしよき物を残らず渡しけるに、千四百五拾兩皆一分にて取出しける。日本一番の遣手の手前者なり。此男夢かと思ひ、其後枕頭に有明ともして、契り込めて嬉しがらせけるとなり。

## 五色に焼かれて煙大臣



誰どふ言ふても嫌ひな顔する人、男女共にをかし、神代此かた世に遊興の上盛なり。孔子も椀久もどこから生れたとおもやるぞ、釋迦如來は脇の下から誕生しますとや。今の衆生そんな事など合點はせず、されどもうか／＼と鉦を叩きて念佛申す人も有るなれば、賣僧の世渡りもあるぞかし。爰に梅の都を住所にして、江戸商ひにたのしく成り、一生秤目せりて何の楽しみなふ八十六迄暮しぬ、子もなくやう／＼近き年養ひて、他人の物になす大分の金銀を世の慰み事に遣はざるこそもどかしけれ。折節今を限り程に煩ひ出し、老人なれば療治盡て蛤貝にて取湯など少しづゝ進めける。後や枕を人々取廻して看病致しけるに、夢の如く目覺して、火が見たいとの願ひ、それ近づくはと持佛堂を明て御燈明をあげて、是極樂たうとい所へ參り給へと言へば、いや／＼佛の火の事ではない、夜店の火が見て死にたいと言はれければ、各々驚きて、十夜の夜店かと尋ねしに、新町のことじやと養子を近ふ呼び寄せ、心かゝりの一つは女郎と一代の中參會せぬこそ残念なれ。今生の思ひ出に見せよ、見て死にたいとの願ひ、さる揚屋に行きてひそか

に内談するに、兎角女郎は賣物、御心次第に御出と申せば、彼親仁乗物にて靜に同道申す、いよくあらしを頼み、合點づくにて太夫殿を呼び寄せ、酒盃始めるに、少し親仁浮出て、先三十日は揚詰にして、爰で養生と言ひ出し、誰か教へけん懐よりほしがる物を取り出し、一人に五六兩つゝ露打ちければ、是は親仁様へ死花が咲くと、勇みて人知らぬ年寄大臣と言へり。四五日も過ぎてから、老人氣を持ちて床入を望みける。迷惑ながら沙汰なしに身を任せけるに、足の仲かゞみ成難く、身をもやして涙をこぼし、三十年前に此心ざしあらば、仕たい事をするに、今となつて口惜しや、若し此近くに不老の薬もかな、一粒を千貫目迄に買ひたし、欲を放れて言はれけるもいとしや、是を思ふに女郎狂ひは四十より内、公事は五十迄、それ過ぎては後生願ふが善し、せめては今二三年此身にて成りとも長生仕たし、正月も盆も勤めてやつて、爰で座敷踊が見たいと申されければ、聖靈の荷物に成給へと笑ひけるに、此言葉耳にかけて、何時迄成とも命の終る迄爰に居るなり、息引取らば是から葬禮すべし、あゝ浮世の思ひ出と、大事の太夫



殿に樂煎じさせて、割一盃十六夕つゝに當るを厭はず養生しどころ、此上の樂み  
あらで、揚屋も一日成とも命有る程が銀なれば、随分如在なくあつかひしに、人  
は限り有りて、終に往生致されしを、是も別れは悲しく、女郎も誠の泪袖に餘り  
其夜道頓堀の野墓の煙となし、塵も灰も残らぬ朝、夕べは此物語終りぬ。

貞享伍辰年

武州日本橋南壹丁目

書 林

攝州大坂折屋町

平 野 清 三 郎

四鶴榮花咄奥附

江戸屋莊右衛門板

元祿十四年正月吉日

山口屋權兵衛板

附 録



椀久一世の物語

上卷

目録

一 夢中の鎔

庭木の梅に辨才天の印ある事

二 人のほだしは女の敷銀

中脇差は元の鞘におさまる事

三 野郎宿は不破の關屋

元服くやめどかへらぬ姿の事

四 花車は引れてのぼりづめ

河州わしの尾まゐりの事



五 時ならぬ数の子

鬼はそと福はうちに 一步打つ事

六 袖乞なれど義理の姿

をれてもさし楡に氣を付る事

七 世界は夜が晝

女郎松山に身をわするゝ事





梶久一世の物語 上卷

一 夢中の鑑

毎年正月七日に津國箕面山の辨才天の富突とて、諸人福德を願ひまゐる事あり。是を思ふに、皆欲に目の見えぬ夜の道、浮世小路の悪所駕籠、四人揃への單物に、染込の扇の丸、肩で風きらして行く人を見れば、大阪堺筋に名を聞きし梶久といへる男、縞縮緬の淺黄に、白縹子の長羽織に、京の幽禪が墨繪の源氏、人の目だつ程なれども、其頃いまだ世に衣裳法度もなき時ぞかし。人より早く參詣て岩本坊の客殿にしばしまどろむうちに、天女あらたに枕神に立たせ給ひ、十五童子の持ちたまふ寶のうちに、藏の鑑を與へ下されしに、夢心にありがたく、思ひの外なる金銀、大分の主となりて、色町の諸分よくつかひ捨てんと申せば、辨天笑はせ給ひ、汝に鑑を渡す事、外より取込む福德にはあらず、親代に溜置きたる内藏



を、母親自由にさせぬを不憫に思ひて、この合鑑授る也、今より富貴にはならぬ身なれば、すいぶんく色狂ひを細長うすべし、わが物ながら何ほどのあるともわれは知るまじ、汝が母千貫目持にもあらず、わづか有銀七百六十貫目餘なり、子供狂ひを折々の慰と思ふべし、傾城狂ひを必ず止まるべし、やめずは末々繪莖折か道心者になるべきと、まざくとの御靈夢すこしも有難くは思はず、それは天女の同じ女をそねみ、恪氣と思はれ侍る。野良に懸りても淺ましくなりつる人、むかしより限り知られず、兎角は小さき女心からの御意見なり。人によりて始末を元として、一代身には絹の下帯をかゝす、口には魚鳥の味を覺えず、道頓堀役者の顔をも知らず、新町筋は順慶町を西へ行くも、東高津に景清觀音があるも、天王寺の彼岸櫻は春咲くやら、生玉の荷葉秋見るやら、谷町の藤見も、川口のはせ釣も、天神の舟祭りを見た事もなく、遍照院の紅葉見も、新清水の螢も、住吉の汐干遊びも、玉造の稻荷に茶屋があるをも、難波に鐵眼の堂が建つたも知らず提重といふものは公事宿で見はじめ、鼓の音はありやうがりに聞き覺え、蠟燭の

火は餘所の葬禮の時ならでは見ぬ男、世間の義理もかまはず小錢を蓄めて、是れ大黒殿の守り給ふより仕合せ、いや天女の御惠みとたふとがる人ど、此大盡など、一つ事におぼしめさるゝが違ひといふかと思へば、瀧の響松の嵐に夢さめて、明くれば八日に下向してげり。わが宿の白梅の一の枝に、不思議や唐房のつきし銀鑑ありくくと見え渡る。是は争はれぬ靈驗と喜び、戸棚をあげそめ、手元にあるを幸ひに、先づ二百兩はづしそめ、これ吉日と帳を綴ち、このうはがきに、よろづ色里うれしがり帳と記して有りける。これに付くるもいまだ弱きさばきと上分別を出し、人に取らした物の返る事にもあらずと、其後は控へなしにつかひける。其年は腕久二十七の春の花もばつとやつてしまひけるとや

## 二 人のほだしは女の敷銀

浮世に氣の毒なるものは夫婦いさかひの所へ行きかゝり、其座立たれぬ首尾にぞありける。腕久親しき人、時の鐘つく町に住みなしてありしに、夕淋しき程に尋



ねけるに、主人は茶筌髪になつて中脇差に手をかけ、二十三迄生きたも百年目、ひとりある悴を刺殺しておのれが存分よといへば、内儀は長櫃をあけて新しき衣類に着かへ、せはしく庭に下りて親里へ歸ります程に、跡から暇の状と八貫目の敷銀渡して下され、こなたも男じやもの、いやな女房には添はしやれぬがよいと聲高にいふを、兩隣の人分別らしく引とめて、さりとはこれ、そなたの心任せに向後は亭主の夜歩き廢めさせ、公儀用の外は念佛講にもまゐらすまじ、其上けふよりは寢道具のあげおろしもお内儀の手にはかけさすまじと、さまざま詫言すれば、此女立ちとゞまり、其儀ならば、折節持病起る時は肩をも捻らします程にといふ。それを聞きながら兎角の返事もせず、近所衆に向つて節々やかまじき事ばかり聞かしますと禮をいふ。此男の有様、さてもく口惜しく淺ましく見えける。日頃は人中に出ても一分の挨拶、手なども大橋流を大方に書き、惡銀つかむ程にもあらず、十露盤も損徳の置きやうをおぼえ、風俗も中形の肌着は今はやるわけ知りながら、世につれてふびんなり。思へば三年以前の霜月に祝言せし

時は、我れも勝手まで見舞ひしに、あの女大振袖白無垢を重ね、膳に坐りて箸もしづかに取りて、鱈せゝらす、焼物に手もかけずして、よろづたしなみ深く、灯火の影少し背きて、伊勢物語義經記杯を中音に讀みて居て、外へは心移さず、わが男のうたゝねに氣を付け、裾へ蒲團着せけるなど羨ましく、人の家には妻のありたきものと思ひしに、今のいやなること思へば、騒ぎ中間の若き者には、一代持たすべきものにはあらず。これに年中に費す物を色里につかへば、春は櫻に馬つながせ、秋は月夜に提燈で送られ、夏は異り扇の大團うちばに汗を知らず、冬はぬくめ小袖にまかれ、足さすらせて髭ぬかせ、僞語まごれどもそれを改めず、入粒いんつぶの柄かぶをほめ、家質いんじちのながれまへを知りながら、居宅を大きに申しなし、その人の心のごとくのぼす、のぼされながら、此の面白さ又外になし。椀久それまでは末々の女郎狂ひをせしが、始めて誘ふ水ありて、伏見屋の雲川に橋かけて明暮通ひ馴れて、うかうかと遣ひ捨てたる銀知つた人もなし。是れ暗がりの鬼、年越の夜有あや増まに算用して三十二貫行方知れず、目に見えし物とては、禿市十郎に、重打の紫



帯と、清兵衛にさゝしたる提煙草盆ならでは残らず、大方積りもあるに、むしやうといふ男是なり。ある時河州上の太子より、親代からの宿坊はるゝの所を、里の長芋御札など持参して、機嫌を見合し、長々と口上を述べ、本堂の上葺の奉加帳を出されしに、椀久驚き、佛の事ながら時分がらの事なればとて銀子二匁付さける。彼法師いたゞきて龍田の紅葉の頃かならず泊りがけに御越しと申して歸られける。

### 三 野郎宿は不破の關屋

人に約束して物もらふも手に取らねば當所あてどにならずと、世間の随分かしこき南の堀の末社が語りぬ。併し貰ひながらせはしうも申し難し、女郎を太鼓前にもらふに、とやかく身拵へに隙を入れらるゝは、商下手あなひでたといふものなり。殊更短夜の折ふしは其の心あれかし、風絶えて宵寐もならず、出来心にて只ひとり色町の東口にまかりしに、早や門をしめける程に、ひそかに音づれて椀久じやといへど答へ

ず、くちなし色の物を遣らぬ番衆なれば、あけぬもことわりと思ひながら、少しはつれなく、横堀の橋の上に立ちわづらひ、一夜も色なく明かす事の本意なく、是より遊興をかへて道頓堀に行きて、過ぎし頃よしみの太夫子探せど、よきものは何國いづくにても勤めに隙なく、やうく旅芝居の花川順之助が方へことかげに尋ねしに、近き頃宮島より歸るのよし宿に居るを幸ひに、竈の前を通りて小座敷に入れば、六疊のところ四でうは疊しきて、のこりは薄縁うすべりにてくろめ、片隅かたすみに香の物桶、布織る道具をかた付け、壁もあばらに、腰張こしはたは十二段の淨瑠璃木さる程に哀れなり、西窓より日影を受け、うら道なしの家にて、氣詰りながら是非もなく、來年の事を思ひ出して、閨が有るによつて三十日の遊び徳と、定めなき命も知らず喜ぶうちに、朽木盆に盃をすゑ飛魚こひうをのむしり肴拵へては置きしが、是へ出さぬは酒買うて來るを待つと見えてをかし。亭主間をぬかさず罷り出で、下博勞くだはくで小判拾ふたる話をすれば、其間にかゝは乳呑子を棄置き、髪をなで、取らし、袖下そでしたみぢかき半瀑はんざらしの帷子かたびらに着替ゆれば、東隣より金入りの女帯を持て來て貸す由、ま



んまと仕立、久しぶりで是れの太夫が御目にかゝりますといふ。慰みは外になりて、内證見るに悲しく、順之助も年月此勤めしてから、世に變りたる事もなし、此道を止めさせて堺筋の若い者に仕立、後々は二親の爲にもと懇に申せば、亭主喜び、實子なればひとしほ行末の事を氣遣ひ申せしに、萬事は旦那へ任すと頼めば、椀久請合、明の日早く脇ふさがせ、其後角を入れさせ、間もなく元服させて名を久兵衛とあらためて一段の男になしぬ。親どもも斯る板びさしのすまゐ見るに外聞わるし、此の所を先づ十年の借地にして、普請の物數奇我等に任せと、俄に差圖をこしらへ、長堀より杉檜木の柱ごのみして、あまたの番匠を集め、それ／＼に前銀を渡し、吉日を究め作事を始めける。人の仕合せは知れぬものと、此若衆の事を羨みける。はや石突柱立すぎて、屋根葺くばかりの日までも椀久見舞ひしに、ある日三津寺の観音の前にてやり手の久米に遇ひける、それからは何とて見えもましまさぬぞ、あなた様には御事ばかりにて物思ひまします杯語れば、泪もろく袖に彼家普請の入銀持ちながらそれとはと、直に此女とつれて新町に行きて、順之助事は思ひ出してもせずありける。怨みて甲斐なく、歎きてとどかず、公事にはならず、此家住みもせぬさきに荒れにけり。

#### 四 花車は引れてのぼりづめ

松原屋の初花に逢ひしが、間もなく落花心になりて、四五日はよね狂ひも止め分にしてありしが、女郎も弱からず、其後は文しても音信されば、俄に求むる戀もなく、吉田屋の表に假寝して、いまだ目も静ならぬ内に、見知らぬ禿が萎れし一枝をかざし、きのふの詠め鶯の尾の山はさかりに往きしが、見ぬ人の爲にといふを聞きて、誠に昔男の植ゑ置きし名の櫻、散らぬうちに見に行かぬかと、誘ふ水淀の枝川に屋形舟をかざらせ、太夫の禿ばかり十二人つくり若衆に仕立。誰忍ぶ關はなけれど、京橋の町はづれまでは幕に灯を包みしが、鳴野といへる里の邊りより四挺三味線弾き掛け、一のやの十郎へ節にて大踊り、目馴れぬ百姓は鍛かたげて手はなつても道理なり。難波に住みて梅の酔いも甘いも辨へたる諸人、氣を取



られて能はぬ欲の出来て、銀さへあらば浮世の思出にあの身になりて、何事も夢の春なれや、飛蝶こぼてふそれも夢と、木綿着物の親仁ども無用の無常を覗じける。入相ぢかくなりて、夕日紅の梢に漏りて麓にあがれば、紙包にせし物を御馳走のためとて、日頃御目かけられし太鼓仲間よりは是まで持たせ来しが、なんとも知れがたし、椀久前にて解きあけしに、藤山吹の花車に色々の飾を盡し、中にうづ高き圓座を敷て此大盃を乗せて、五色の唐房からぶさを付て、十二人の美少女是れに手をかけ、小歌さままの音曲にて五十丁の坂を引き登れば、あたら櫻も此色に負けて、けふ更に見る人もなし。心ある者は間もなく其身のすたるべき事をなげきぬ。何れ奢の第一なり、我より上見ぬ鷺の尾参詣、春宵一日に七十兩の金子、惜しや此のもうけにくい世中に(以下若干赤字)

## 五 時ならぬ敷の子

(上文若干赤字) かになつて何の口説も仔細なく逢はぬやうになりぬ。兎角女郎に好

風なる仕出し、て思つつかれんと思ふも物事むづかし。買うて遊ぶ程埒のあきたる事なく、よき物大分だいぶんほしや、世に無き物を今の間に調とやうといふ。椀久聞きもあへず、金銀で叶ふ物ならば、只今御所柿と楊梅やまもも喰はふといふ。それこそと申しもあへず天満市の町をさがし、此二色を求めける。頃は卯月の初めなるに、無い物も有る物かなと、大盃の威勢の程有難くたうとく思ひ奉る。椀久次第に物好みして、紅葉を秋に見、螢を夏飛ばするは世間にある事、をかしからずといふ。折ふし丸屋の梅が枝我名を折枝せうえの染形、鶯をとまらせしは、いやと云はれぬ衣裳つき、宛然さながら春めきてうつくし。それよく餅花して柳にやりしもきのふ、けふの慰みには九軒の吉田屋で正月事して遊ばんと、晝過より申出して、俄に裏口に松立て飾り、新しき羽子板手鞠、女郎あまたの庭遊び、亭主は袴肩衣着て禮に出る。市左衛門は烏帽子着て若惠夷賣わかゑひ、曆賣、長兵衛は榎勝栗賣、臺所は寶引、二階座敷は謠初、居間では節季仕舞の咄し、門を掛乞の通らぬばかり、内は正月にすこしも異なる事なし。揚屋の肴に不斷敷の子を漬けて置くこと、此時の用に立つ事と



笑うて、土器酒かはらけさけに吞暮らして夜に入れば、所々灯火猶面白し、一間ある納戸の神にも燈明進じて、よく清めて置けといふ、爰は何のためと申せば、知らずや女郎衆のさげ食の齒固めをなさるゝ所と申す、いづれも様の御爲にわざとくらがりに仕ると申す。そのうちに八助才覺らしく移をさして、仔細らしき顔つきするを見て何ぞと問へば、座敷塞げの砂になる客の目鼻突せて寄せぬためと申す、是又をかしやと、椀久年男勤むるとて、兩の袖に一步を入れて、鬼は外客は内へと打ち散らす程に、徳若に五十兩、君は榮えまします。

## 六 袖乞なれど義理の姿

札あまりに讀み打ちかゝつて、其座立つ事を惜む、夜もすがら仕合よく勝つて三百文、さもしやせまじき事なり。寢もせず明かして歸るに、朝霜いたく置きて、難波橋の川風さむきに、年の頃四十あまりの女乞食、あはれや袖も無き單衣なる物を身に巻き、菰をやどりの頼たよりりにして見えけるが、かすかなる聲して、けふは

十月十五日、願くは佛様の日死にたや、斯く世にありて何をか樂み、つらや命といふを聞き捨てにして通りしが、言葉にやさしき所あれば、連を待たせて立ち戻り見るに、此淺ましき身となりても黒髪そそげず、一筋元結かけて、半折れたる差櫛さし是曲者、昔の思はれ、氣をつけて見れば、さし俯うつむきて、一錢くれてお通りと申す。最前勝ちたる三百文取出し、是を残らず取らすべし、我れが黒髪は連も捨てる物なれば、切りてくれよと云ふ。此女笑うて、こなたに何の譯あつて髪切りて參らすべし、此五七日水に口さへそゝがねば、しばしの助けに只一錢賜はれ、三百文は欲しからずと云ふ。さりとしていたはしく、其錢そのまゝ取らせば、いかな事申し受けまじ、髪切れと仰せられし御一言、いかにしても身にこたへて恐ろしと投げ返しける。一たび乞人の手に渡りし錢なればとて大川に捨てける。これぞ國土の費と滑川のいにしへの事思ひ出して、友とせし人椀久を叱りぬ。是に限らず斯様の心行き世間に數多あり、長者にても溜るまじと云ふ事は椀久耳にも聞き入れず、泪に袖を浸し、今の女の心入れよりさてもく無常觀じける。あの如、



袖乞になりても髪を惜む物なるに、傾城の勤めとて義理を元とし、情を種とし、指髪を切る事、思へば／＼誠ある心根、客の勤め缺きて嫌ひても其通りに身は立つ物也、今迄は惜しき男の逃るゝを繋ぎ止むる戀の大綱と思ひしにさにあらず、今まで切らせたるあまたの髪そこ／＼に投げ遣りて、鼠の巢ともなり行くべし、せめては取集めて高野山に納めんと思立ち、曲物にそれ／＼の名を書きて、いまだ浮世にある人弔ひ、同行五人、通し駕籠九軒よりさゞめかして、住吉迄色人よりの贈酒、昆布屋の清右衛門が座敷にして、是より精進入とて、目の前の肴物、思ひ／＼物好み重ねて、咄しの種とて、生貝百ばい五人に残さず吞くらして、入日那古の海に紅葉と見し時、浦の苦屋の淋しく別れて、行夜をこめて其の曉に高野の麓禿といふ所に着きぬ。きのふの酔は今に駕籠に夢を見續けしに、下々が禿々といふ聲に目を醒まして、大鼓前かといへば、いづれも驚きお山前と申しける。まことの眠醒めて、是かや女人堂、一日の事ながら女を見ぬこと悲しく、花摘といふ所を過ぎて、旅人の心やすめに建置かれし丁石の書附、昔の春を思はる

、櫻町中納言殿の筆の跡とや、東の山陰に玉川の水、忘れても毒は彼の一つの色なり、人皆慎むべき事ぞ。此御山に住まば自然と其道止みて長生すべき物を、今まで仕すごしたる事共を悔しがる男あり。椀久興を醒して、それは實の心から申すか、べん／＼と浮世にありて別の事なし、何とぞ六十年を三十年にたゝみて死ぬるが本分別なり、爰に住みて何か山の甲斐あるべし、肴を食はずに、女の顔を見ずに、一つも娯樂なしと大笑ひして行くに、佛法名山の奇特は御廟橋近くなりて、おのづから心靜に殊勝に物怖ろしげに、年頃女郎ごもによしなき難義を申し掛け、血を出させし事を思ひ出しければ、蛇柳の影より血まじりに小指の流るゝ事、我目を悲しませ、さても／＼是を見、此後はと心ざし入りかはりて、奥院にては出家にもなりぬべきほどに思ひ、下向にも信心をわすれず、中々色の事申し出すもふつ／＼と嫌ひければ、友とせし人々迷惑して、我々は色町に身をそめし者なるに、あたら大盡無用の所へ連れ立ち慰みかけぬると、之をなげく事大方ならず、堺の港まで椀久駕籠にも乗らず、わが身助かればとて人の苦しみと申せば、



残る四人も駕籠ありながら、歩行にてやう／＼南の端の橋わたる時、乳守女部門ちりもり立時たじ分ぶんにて、濱邊の松陰に人待ち顔なるを見て、椀久俄に髪をなでつけ、はしをりをおろし、すぐに天王寺屋利兵衛方へ行きて、名ある女郎を十人づゝ五日が間騒ぎて、近年堺にめづらしきおかた狂ひ、何れうつろひ易きは人心ぞかし。

## 七 世界は夜が晝

いかに我内なればとて、毎夜あけがたに戸をたゞく事、近所は云ふに及ばず、掛がね尻ざしが手前も少しは恥ぢぬべし。椀久妻たる人心優しく、姿のうるはしきこと見過ぎし藤屋の朝妻にちと面瘦せたる生れ付、難云ふべきかたちにあらず、されども町の女の風俗は外なり、色里のよき事見馴れて、それには何かつゞくべし。椀久其頃は丹波屋の松山と云ふに逢ひそめ、契りきな形見の袖の紋を究め、横堀を浪は越すとも、變るな變らじと言ひ交して、明け暮れ通ひぬ。椀久も其時分は手たれ共にもみ入れられて、大方に帥になつて面白き最中なれば、誰が意見

にても聴かぬ筈なり。必ず色遊び物も使はず、かしこくなる時分は銀がないものなり。銀のあるうちに帥になるものならば、久離きらるゝ者はあるまじ。椀久も世上のつもりよりは早く疊まれし事不思議なり。さのみ人の目立つ程の事もなかりき。人の女の習ひにて世をわたる業大事に思ひ／＼て、氣をそむかず理ことばを盡して、さほどふびんと思召さるゝ御事ならば、外の人の慰みになし給ふも云甲斐なし、けふのうちに請出し、下屋敷に置かせられ、通ひ女に遊ばせと、枕箱より一步物ものか數四百取り出し、是も其女郎に衣裳にても遊ばされ、御贈りあれど參らせけるに、嬉しげに取りて、其一日に何にした事やら跡形もなし。松山請け出す約束せし甲斐もなく、昔ならば僅三百兩の用意ならねば、是を思ひとなし、うか／＼いなものになりぬ。此本妻もよろづ云はで思ひとなり、果敢なや十八の夏のはじめ、終に世を早うなりける。椀久も是には哀れを知りて捨つる身となりて、其後は彼里へも往かず、人の交りも疎くなりて、其年の霜月より冬籠りて、春待つ樂み無くて、大晦日はいにしへから知れての關又關とぞ。



椀久一世の物語

下卷

目録

一 手桶も時の雨笠

丹波屋の妹背思ひよらぬ涙の事

二 哀れを見ての錢五百

伏見の夕霧首尾なしの別れの事

三 いろは小紋の袖の秋風

借着してもあはぬ小妻の事

四 現の情咄

何とも知れぬ通ひ女の事



五 小歌のねうち

袖になげ入れしは昔のゆかりの事

六 水は水で果つる身

はちくの聲末期に聞く事

椀久一世の物語 下卷

一 手桶も時の雨笠

此家屋敷うちに二間に三間半の内蔵あり、來る二月三日に入札にて賣り申候、椀久一度は手廣く店商ひして住みしが、今日は早や椀折敷に書きし淺黄櫻もばらりと分散になりけるよと、無常を観する夕暮の鐘、あすもや聽かん浮世の沙汰、これと思ふに人みな内證は張物ぞかし。子に太鼓を打ち習はせ、娘に惣鹿子を着せ鞠揚弓に日を暮し、大やうに見掛ばかり、さりとは恐ろし。同じ丁銀てうぎんを天秤響てんびんき渡る程、日には百度もかけ、廣庭には延米を借りて積み重ね、まだ堪忍のなる表向の屋根を葺き替へ、寺では四十八夜を申して名に觸れ、神前には人の目に立つ石燈籠寄進して、所家名ところいへなを高うなして慥に思はせ、手形借りの金銀取込む事也。かやうの人もわざと巧みて身體をつぶすにあらず、その分限より物毎仕過ごし、



大方は女房家主奢りて、無用の腰元仲居を抱へ、歩行で往く方へも大駕籠おほのりものをざゝめかし、見た所は是よし、算用してから一年に二十五貫目入帳あるに、世帯は三十貫目、入かたの日影の如く次第に足元から暗くなり、燈火の消ゆるまで世を張るこそうたてけれ。さのみ人も大分倒さぬうちに、椀久仕舞を人はかしく云へど、かしくば迎もの事に三十年前ならばと思はる。今は只久太郎町に家一軒、残るものとは立縞綿入れ一つになりしが、其年の卯月始つかたになれども、人並の更衣も知らず、青葉なる藤の森と云へる所に住家を求めて、南に窓ありて東口に繩簾を掛け、軒は蔦かづらのしげり、袖摺の長露地ながろぢ、爰ぞ宇津の細道の心地して、夢にも人には會はず、物の淋しき夕は蚊ふすべの鋸屑賣のこ屑うり、あしたは日貸しの錢取りにまはるなど、せはしきことを聽きて、世を渡る業とて花蕙を織習ひ、悲しき中にも色は廢めがたく、上町に名のありし風流女やぶさめに久米と云へるを更に又呼び入れて、久米のさら山さらく其日暮しに互に情の深き手釣瓶を汲みあげ、薪を小割して共稼ぎ、是も程なく氣をつかし、一軒の家を心當に、遂には十三貫

目に賣りて、此銀も廿日餘りに皆になして、一合油を求むる便りもなし。此妾も見限りて俄に暇乞ひける。何れの女も世につれて、かやうの仕掛此女に限らず。其頃椀久友とせし人に惣八と云へる男、是も若女じやくぢよ二つの色遊び過ぎて、江戸へ下るまでの宿とて、椀久頼みにして訪ね寄りしに、折節氣の毒なる首尾に來掛り、我身の事は差置き、親しき異見を聽分け、椀久手に持ちし火吹竹を捨てける。宵はさもなくて夜更けての夕立、歸るべくも傘なくて、頼むこの宿も屋賃濟まさねば、荒れたる棟を其儘に雨も溜らす漏り來るを、手桶手盥戴きて、三人ながら身を銘々さばきに凌ぎぬ。然も鳴神厳しく油火の影をも見ず、稻光りのうつりに顔を見合せ、斯く淺ましき夜も明け、常の朝日影うれしく、宵に濡れたる雨袖を着ながら干して歎く所へ、絹ちぢみに練の白裏付けて、龍紋の夏帯右の脇にむすびて、本紅の二重なるふたの物して、薄紫の帽子加賀笠深く被かぶきは、又あるまじき若比丘尼、是に心を取られしに、彼の女法師やさかたなる聲して、此邊に妙清と云へる人の庵はと尋ねられしを見とむれば、近き頃まで色里に見しや姿、茨木



屋の妹背と名に呼びし女郎、是はと云ふより涙しばしありて、各々様はいかにして斯くかすかなる御風情、さてもく知れぬ世やと訊ねければ、惣八始めを語れば、妹背昔を思ひ合はせ、我事は折々一座に見まゐらせたるばかりにさへ是より外に哀れを見ず、年月逢はんしたる松山様身にしてはいかばかり悲しさ、思ひ遣るも限りなし。我身も御存知の御方、北濱へ身請け喜ぶ折ふし、其人様曾根崎の煙とならせ給へば、兎角は世を捨て斯る姿になつて、其御跡をせめては弔ひまゐらすなり。然も去年けふなれば、心ざしある御寺へまゐるの折柄、又外なる泪をもとめける、早や松山様も是非なき方へ引取れば、まゝならぬ御身、さぞく思ひやられしと申しも果てぬに、椀久面を變へ、狂人の如くなりて、我れ獨合點する言葉の末の松山に怨み、哀れにふびんに聞えける。妹背惣八にさゝやきは、いまだ花待つ身なれば、うかくと難波の住居もよしなや、江戸へ思召立たせ給へと、連れたる下女が提げたる風呂敷包みより、着替の帷子二つ、路金とて一歩十五、耻かき御饞別と云捨て、歸る。此女郎の心入れ椀久淺からず思ひ、追付

江戸より此返しをきつさりご申すべしと、其夜俄の旅用意してから、妾の遣りどころ案じけるに、此女わたりに舟、中津川の親里に歸りぬ。

## 二 哀れを見ての錢五百

京橋越えて野田町のはづれ迄惣八も送りて仕合よく、頓て上りを待つと云へば、椀久此返事はせず、其方も若い程に向後色遊び思ひ止まれなど云へるは、早や分別もかはりたると嬉しく別れて惣八は歸る。椀久は思ひも寄らぬ旅の空と江戸ぶしの淨瑠璃、聲の聞ゆる程は立ち止まり見るに、出駕籠ねぎらずに淀まで約束して、行衛も知らずなりぬ。其日に伏見泊り、夜に入りて撞木町の夕霧に、此前戀を殘せし事もありと行きて、隙を幸ひに逢ふて、女郎のとやかく申し掛けるをも聞かず、明の日五つの鐘のなるまで、只一寢入りにして、急ぎの江戸じやと起き別れ、逢坂山の關寺より又無分別になりて、駕籠跡に戻せ、是から愛宕へ參詣すべしと、夢の如くに都入り、北山あらまじに見めぐり、愛宕のしるべの花標か



たげて、また伏見に出でしが、大阪へ下り舟の錢さへなくて、十里の夜道しかもはだして、三日目の朝、元の藤の森町に歸れば、其まへの日残れる諸道具も賣拂ひ、其家には獨過ぎの婆々住めり、椀久是非もなく、たゝすむ方もなかりしに、又惣八才覺して、藤の棚の西側すこしの裏屋を借りて、何も持たず何もせず、明暮日數ふりて、素湯吞まぬ日もありける。昔の友へたよりて、少しの合力受て、それも有きりに飯鮪玉子をとゝのへて、薄鍋掛けて、是より外の楽しみなし。此心を世間寺の出家に持たせたらば、來世に導かるゝ人も佛になるべし。殊勝なる身持ちぞかし。此事を知らず、京の島原より差引の殘銀取りにまかりて、此事ばかりに此度下れば、是非に埒あけて上る心ざしにて此宿にたづねて、此様子見て申す事はさて置き、錢五百蒲團まゐらせて、揚屋の男は都へ歸りぬ。色は色知る下々までやさし。是れ浮世にある盜人におひと云ふとは違ふたる事ぞかし。

### 三 いろは小紋の袖の秋風

秋も末の夕風冬めきて、人の姿も重ね着なるに、椀久は鼠色のいろは小紋の袷一つになつて、哀れは是より世にまたあるまじ。朝は露を拂ひ、ぼんの長兵衛方に行きて命をつなぎぬ。この男世にある時目を掛けられし昔を思ひ出して悪しくは當らずはごくみしが、同じ所にとゞまらず、きのふは野里川の水につれて濱に出て蜆を取り、けふは玉造の野菊を愛し、明日は九日の栗喰ふ事をたのしみ、何の罪もなく、寐もせで見る夢の如く暮らしけるに、惣八夜見世に行くことを羨み、跡より來りて新町橋の中ほどにて聲をかけて、我も色町へ行きて、久しく見ぬ女郎をかりの慰みと云へば、其有様につれて九軒の吉田屋に入れば、夫婦下々迄涙にして、さりとはおいとしゃ、此夜寒にと喜左衛門、紬縞の綿入れ着せけるに、大男の當世袖、椀久手を出しかね、盃の時不自由なるを笑ふて一興にして、其座には扇屋の萩野、丹波屋の遠州、車屋の早川杯ありて、過ぎにし事を問へど云はず、語れど返事をせず、片隅につる居て吸物の出るたびに喰ふて、口のうちにこまい物くと云ふこそ猶は哀れに聞えて、皆々涙にしづまりける。客たらさる



、時の顔つきとは違ふて誠あり、さてもく松山様はお主様の事のみにて、それはく御歎き、人こそ知らぬと遠州申出すを聞捨て、赤面して門にかけ出るを色々止めしが、川口屋の門より姿を見失なひける。九月二十三日宵は戀の闇にて、三番太鼓の鳴る時立ち出れば、提灯なしによね様たちのお歸りも見えける。金吾井筒、小柴、藤山交りの一座、住吉屋の四郎右衛門より惣だち、遠い芳野より是が花じや、京屋よりは有馬、定家、三笠、清原、山の井、岡山、志賀、から崎の一つれに天神揃へ、是もいやとは云はれぬ色盡し、越後町よりは吉田、豊浦、歌仙、さんしう、入組みて夜の錦も是は見えける。されども月夜なればとて、提灯ともさぬは如何にしても始末過ぎて見苦し、さりながら一年積れば大分の徳損ありとや、此里で其算用しては鼻紙の入ること見て驚くべしと、大笑ひして東口に出づれば、橋に腰かけてつかひ捨てたる金銀の惣高合せて見て、今あらば見事な騒ぎすべきに、何を一つ名の残る勘定もなしと云ふ聲聽けば椀久なり。何とてさきへ歸りけるぞと云へば、忽ち狂人となつて、思へば此かね恨めしや、ひのへの

日は又日和よかれ、やろか信濃の雪國へ、後家と云ふ後家に霞のかゝらぬ後家もなし、化物屋敷ちんからり、傾城買ひのなりの果、鬼に按摩とられては、梅花の油辨慶が其若衆の權之助、雪踏かたく死手の山、今度天より降り下る、此下帯は有難や、云ふ事一つも埒あかず、やうく捕へて宿に歸りぬ。

#### 四 現の情咄

冬の日の暮るゝは夢なれや、難波の春にもなれば、椀久しれぬものになりて、夜はうつゝに明方ありきて、晝は日影見ず臥して、是ぞ世界の島はづれに住みし、夜を晝にする國のごとくなりぬ。惣八すゝめて出家になりて世をわたらば、人の憐みも有るべしと、さまざま諫めければ、又本氣になりて、誰か百年の命にもあらず、法師になるべしと申す言葉の下より、頭揉みてさあ剃り給へと、西向に直りて、心静に座を組みしは、哀れに殊勝に見えける。さては發心誠なれば、これより三里東に河内の國大地村とて有りけるが、此里の一向寺我れ久しきよしみな



れば、爰に行きて剃髪せよと云へば、喜ぶことの限りもなし。此男親もなし子もなし金もなし、元より智慧もなし、然も世に見限られ、是非にかなはぬ俄後世に思ひよるなれば、詮議もなく坊主になして賜はれとの添狀持ちて、彼の寺に往きぬ。折ふし四月二十二日の事なるに、遅櫻の名残に此一郷あつまりて、亭坊まじりに手作りの酒事して有りけるが、此事を聞きて、さりとはありがたき心入れ、衣は人々寄進すべし、扱かゝる時は浮世のはなれとて、身懺悔する物ぞかし。如來の前にて語り給へと云へば、椀久申すは、我れ一代の色事悪事かりそめにはなりがたし、中々盡きせぬ事なれば、是は許したまへ、浮世の思ひ出に、只今髪を剃らぬうちに、習ひ置きし三百兩踊をと申せば、皆々所望と申す、椀久無用の腕まくり、あづま請出すを二三度踊りて、我も松山を請出し損ふたと涙をこぼし、さらば是までと頭を剃りて、法名を榮壽と改め、又大阪に歸りて東高津に近き鹽町と云ふ所に草庵借りて、友とせし人有増の佛棚をもつらせ置きしに、此庵の入口忘れて、其後は宿をも定めず行きなり川なりに、長堀の材木の上に臥しける。

ある夜下女連れし女の來りて、さまたく昔を語りなくさめける。是には返事させず、銷に酔をかけて思ふまゝと願ひ寐入りに、新川音いひきすさまじくなりぬ。彼女いろく身をうごかせども、遂に夢の覺めねば、是なれば何を云ふてもせんなし、又も首尾のあらば相見る事もと云捨て、歸りぬ。其程近き夜番の是を寐覺めに聞きしが、其やさしきこはつき、人間とは思はれず、黙りて夜明けて見れば、黄八丈に紅裏の女着物裾にうち掛け、枕に紙包み氷砂糖を殘せり。見し人此女戀しやと云へども其行方知れがたし。椀久目覺めて此着物は捨て、砂糖嬉しく樂しみとなしけるとや。

## 五 小歌のねうち

御ぞんじの坊主はちく、浮世じやなはちく、昔しじやなはちく、こりや五百貫目入れて揚屋で習ふたなげぶし、一文で歌ふて聞かすが、さても命はあるものか、有る物は残らず使ひはたした、一文くれぬか、堺筋もおれらが居た時とは



さびたの、精出しやはちく、今は郡内編の羽織着れば、大臣くはちくく  
と南へ指して行くに、中ぐらゐなる人の召使ひらしき腰元が、備後町の辻まで跡  
を慕ひ、こまがね包みて右の袖に投げ入れて歸る。是はよき物とすぐに魚の棚に  
行きて、生貝の大きなるを取りて、彼の銀を投げ遣りぬ。あるじ大分餘ると返  
せば、亭主かつて欲を知らぬのと云ふて、取りて横町に行きしが、あまたの乞食  
に取らし、生貝喰ふ迄の楽しみ、いかばかり嬉しかるべし。遙に行きて、履物切  
れて此の仕合せ、錢五文の奉加々々はちくくと云へど、誰が耳にも聞き入れず、  
さては世間が詰つたよ、五文の錢をくれぬからはちくくいふて、日本橋を渡る  
時、過ぎし頃悪所の友を見かけ、履いて居たごめん足袋を所望する程に、脱ぎ  
て取らすれば、今少し大きなるとて手に取るより捨てける。それも心まかせにし  
て、前巾着まへきんちやくより一角取出して渡せば、大盡はづみかど戴きて、あたりなる貸駕籠  
を招き、我れ住吉へまゐるなれば三挺借らんと云ふ、御一人にいかゞと申せば、  
それが昔のまだすたらぬ大盡を知らぬかと乗りて、長町よりざゝめかして、天下





茶屋過ぎて石の鳥居の前に行きてからは是迄なり、すぐに跡へ戻せと息もつきあへず大阪に歸り、彼一步を何か惜しまず取らせける。それより毎日哀れ知る人に貰ひし物其限りなきを手より手に取らしければ、椀久に付添てあまたの袖乞つきまはりて、其日をゆるく送りぬ。ある時芝居歸りの若衆を見掛けて、袂かざし匿れぬ。見咎めて人の尋ねければ、あの若衆に近き頃まで逢ひぬれば、あの子が名の立つ事の思はれてと云ふ。此身に成りても戀の道の忘れぬ事をかし。

## 六 水は水で果つる身

世の取沙汰を大和屋が狂言に作りて、甚兵衛が身ぶり其まゝ椀久を生きうつし、是を見し人戀を知るも知らぬも泪を求めける。或時甚兵衛椀久を招ぎて、何か望み物ありやと尋ねければ、紙子紅うら付けて物まねをする事ならば、其外に願ひはなしと云ふ。それこそ安けれと、俄にこしらへさせて待ちけるに、其後は面影も見えずなりにき。頃は貞享元年十二月の空も定めなや、時雨降りて風立ちて物



のさはがしき、夜ふけて大川筋の末に行きけるに、西國の舟待ちせし人、苦重ねし透間よりともし火かすかに漏れて船中を見れば、都のわけらしき女を入れて、伊丹屋の四季延命酒、春桃花、夏は菖蒲、秋は菊花、冬みぞれ酒、さまざま呑み騒ぎて、川のざんざら柳の白根がく歌ひ掛けて、弾いてあたりに人もなげに荒れける、心を付けて見しに、根引きして行く女郎を、京の揚屋、遣手末社まうとま是れまで送ると聞えける。挨拶は國元の母親も長う取つて今年來年の中には極樂か地獄へ遣るべし。したらば此君をおかさまと云はして、大黒柱にもたれかゝらして、脇から見るやうなと云へば、いづれも其仕合せを此うへながら願ひ奉るといさめける。腕久聞いて何國にも母の親は戀の邪魔なる物ぞかし。われらが親も二三年早く死ねば能い事をするにと、歸らぬ松山が事を思ひ出し、袖の涙より外はなしと男泣きにして、餘所のさはぎに心移りて、嵐三右衛門が六法、是れさ此男中々だるい事、見て居る事でない、舟の苦葺くまきを引きまくりて、女郎のお名前を聞きたいと申せば、大臣腹立して、我が物數奇にて鼻毛よまれて遊ぶに、おのれに

かまふ事かと云へば、腕久笑うて、しやつら二つに刀握れば、覺えありと竹杖をするりと抜けば、まことの事と思ひ、かたへの者の短氣にて抜合はずを、舟人立ちかさなり、水棹みさざ手毎に腕久を叩き伏せ、川浪に落ちかゝるまで、弓矢はちくと云ふ聲も底に沈みて、あはれや浮世の限りとなりぬ。今は其面影ばかり繪草紙に残りて、むしやくしやあたま立縞たてじまの布子ぬのこ、丸ぐけのひとへ帯、草巾着のあきがら、ふところに伊勢天目、すひ口なしの烟管、とろめんのくつたび、細緒の奈良草履、横ひねりのありき振、今に見るやうなる其人は、三十三の暮の年の夢、定紋の扇車も無常を吹く風ぞかし。



貞享二乙丑歲二月二十一日

北御堂前安土町本屋

書林 庄太郎開板

新小夜嵐物語

『名椀久二世物語』

上卷

目録

- 一 死所も多きに爰はさて
- 二 見ぬ世の人に逢ひまして
- 三 又來る事のならぬ詠め
- 四 秤は情の掛そこなひ
- 五 銀にならざる笹の浮世
- 六 毛貫もあはぬ昔の顔付

新小夜嵐物語 上卷



新小夜嵐物語 上卷

一 死所も多きに爰はさて

浄土の春なれや、銀遣ふて遊ぶ中こそ生佛なれ。寂光の都鳥原通ひ、一心白道の朱雀の野中、東門より入初し戀の山、攫み取らば爰ぞかし。殊更今日の濡れ日和雪珍しき富士の姿を譬へて、廿の上ありとは見えぬ若男の、なんぼ隠しても田舎めきて、裾の山道紅裏の三つ重ね、ひとつ前に見せかけしは、嫌なほど目に染渡れど、洒落過ぎて木綿物を樺茶染にして粹様の召したよりは、素人の古き物好の綺麗なる衣裳付こそ増しなれ。此御大臣の國元を聞けば、駿河の府中の人にて、然も後家親にて一人子市太郎様と申せしを、悪所の替名は今業平様と言へり。其昔男は東の方へ下りし、是はひたものに登して京の仕合せになしぬ。出口の噂町の茶屋、揚屋の男遣手禿引舟まで、乗せる言葉を嬉しがり、霜先の小判を丸雪の



如く蒔きける。少し鄙劣さましきやうに見えつれども、此里はどの道にも貫はねばならぬ所なれば、二つ取には紙に書付、あるは又移りばかりにて珍重がらせて、後には其沙汰なしになる事、幾度か身に覺えて悲し。それより近道に此君に廻れくは是程の大盡折ふしは稀なり。されど此方に賢き太鼓の付かぬは未だ知らずや、此客の長羽織を川原鬼が取残せしは不思議なれ。此大臣過ぎし神無月の頃迄は、野郎の偽を誠にして色遊び募りし中に、御機嫌を見合せ、宮川町に幸ひの賣家ありとて七貫目の無心、明の日早く遣はしけるに、間もなく顔見せ芝居近づき、俄に太夫元するの由にて、金子千二百兩貸給へと床入しての長物語、聞くに身縮み上りて、宵の可笑しさ、此時覺めて不首尾に起き別れ、扱も恐ろしきものかな、紋目もおはす宜きものと思ひしに、一度の大願こりやならぬくと、慰み替て傾城狂ひになしけると、智恵自慢の當座咄し、御利發なる御事やと各輕薄笑ひして、向後歌舞伎子狂ひ止めに遊ばせと漸うに進め入れて、此人の金銀は仲間の年取物に定めばや、太夫様の正月を頼み、大晦日の拂ひも此客を心當に落付き、女郎も





宿屋も内證の喜び事。余所へも知らすな、今都に冬めきて切れ物は、東山の郭公はつきやと女郎買ひ、大事に懸け奉る御靈前結ぶの神に立願して、金子のある中お心の替らぬやうに祈れとて、先づ東方に賣子宿千里が外へ拂ひ退け、只西方へ毎日待宵の空も、物の淋しき十二月廿三夜氣色けしき、揚屋町には春の近きを嘆きながらの投節も絶えて、連引の三の糸も切次第に捨置き、末々の女郎五人三人片寄つて初買の殿定め、今となりて時移り品下りたる事ぞ、昔は九月の菊酒より大方は約束せしに、島原には引けたる穿鑿ぞかし。今も譯らしき當世男の通ひけるが、京の銀は何處へいた事ぞといへば、近年大名借にある程は明藏になして、お袖判の手形ばかりになりぬ。當分の用を書いた物は役に立たぬといへども、歴々の太夫様方は筆に隙なく、重ね紙に常の偽雜りの文章にはあらず、皆實なる事ぞかし。此度の正月の事一代の御恩、庭錢は此方にて才覺致しましてなりとも、外聞なれば男分に頼み奉ると、理由さまざまに書送られしに、其男の方より返事なしに、俄に尾州へ勘定に下らせられ、お留守の由にて折角書盡せし文其儘に歸るもあり、又は



此夏の西瓜に今中<sup>あて</sup>られ、萬事限りの枕なりと、久しき食傷を云ひ越すもあり、此冬まわつた河豚汁は崇らぬかと、陰にてたんど譏つても何の爲にもならず、女郎買の偽は江戸も大阪もさのみ替る事なし。最早春といふても日數のなきに、それ／＼に客を拵へ、苦海勤めけるは、色の道なればこそ調ひもすれ、只の人はならぬといふからは、一々にても出る方なく、大年の暮の忙しく、家々の懸乞にあはぬ算用聞けば、百貫目足らぬもあり、拾貫目明くもあり、壹貫目で済むもあり、百目あれば世に恐いものがなうと云ふもあり、拾匁揃へば神の松山草まで買ふといふもあり、貳匁五分ですつきりと仕舞ふといふもあり、浮世を渡る其分際の樂しみ、此宿にも餅あり數の子あり、なるやうに年は取るものなり、只止め難きは奢り、また奢らねば面白からぬは色町なり。彼の駿河大臣市太郎様も日本一のそりなれば、名山の煙立上り、焼止る時節はあるまじ。されども知れぬは人心、随分取盡せと各々談合半に此大臣來り給ひ、よね狂ひもさしてきれ替たる事にもあらず、浮々と爰に蒔散す金子を、人の爲になるべき四條川原の崩れ橋を掛ける

か、南都大佛の奉加に付くか、末の代に名の残る事と云ひ出さるゝを、さりとては悲しく、何れも口を揃へて、末代迄残る事ならば、太夫様を年の明くまで買詰に遊ばせかし、今迄請出す人は數多けれども、是は終にせぬ事と申せば、名さへ残る事ならばそれにせんと、來る春より七年の間買づめ、前金千五百兩取るばかりに祝儀申し納めけるに、此大臣顔色違ひ、眼を見詰め、足手冷えて、脈所を握るに、いかな／＼ないに極まり、皆々驚き、幾藥を與へ、針を刺し、いろ／＼にしけれども、さらりと浮世の隙明き、呼ぶやら泣出すやら譯なく取亂したる、是ぞ氣懸<sup>きか</sup>りなる。烏丸通三條下る町に、此人のお宿あれば是を呼び寄せ、駿河への早飛脚、其内は遺骸を片寄せ、世は知れぬ正月を待つ事ぞかし。

## 二 見ぬ世の人に逢ひまゝして

室町の井筒屋といへる絹賣、烏原へ數年商ひをせしが、萬懸帳持たせ、年の暮を急ぎて行くに、中堂寺の辻にて揚屋のよしといふ女に逢ひけるに、此下女うらう



ろ泪にて、日外の紫鹿子の帯折角くけてまで置きしが、中綿を損にして此方へ返しましよ、此節季の心あて、手に取つたる様なる事が違ひましたと面目もなき斷り、丸口十八奴が物やるにしてから別の事なく、何としてお仕舞がならぬといへば、されば駿河の大臣様に、少うて貳角は給はるにして置きしに、頓死遊ばし、内にも是を嘆かるゝなり、我々殊更悲しきと語る。此吳服屋少し醫心ありて、夫は何時の事ぞ、昨日の暮方にといふ、間のなき事其人を見るべしと、彼の揚屋に行きて、時分がらに氣の毒と悔みて、扱死人を見せ給へと、屏風蒲團を取除けしに、不思議や此人生根はつかねども、手足折々動かしかるにぞ、皆々力を得て、此上の願ひ再び御本復ましゝて、御約束致しゝそれゝの物を賜はる事になれかしと、慾の先立つ顔付をかし。此人いまだ頼みある所を見付し、野送は四五日も待ち給へと申して、歸りにけるぞ嬉しかりき。人の命程脆きものはなし、現なり幻なり、夢路の旅に差懸り、今業平市太郎是なん娑婆に聞きし死出の山なるべし、岩角險にして諸木も立枯れて、其葉色なく、松柏にもあらず、峯に心の猿叫

び、幽に無常鳥の音信、雲穿ち風腥く、眼もくらみ、息の通ひも次第に細き谷の下道を行くに、一人の法師立縞の布子に十徳を着て、前巾着の緒を長く下げ、竹杖に縋り瘦衰ひて來るを、人珍しく嬉しかりしに、近くなれば口早に、汝六道錢の内壹文くれぬか、弓矢はちゝといふ。是何とも合點ゆかず、如何なる御方と言へば、此法師大笑ひして、其方も見た所が半帥そふなが、愚や我を知らずや、女色男色に隠れなく、難波の浦に名を流せし椀久が二世の面影と語る。其お名の高き事、富士は生國駿河にて聞傳へし也、我事清見屋庄太郎とて、片里にて少し色道に譯ある若い者、此程取出し衆道に嘆き、都へ修業に罷り、名の立つ遊びもせぬ内に、西島に移り替り、遊興の床に眠るが如く爰に來りし、如何なる所ぞと尋ねけるに、椀久横手を拍つて、爰は黄泉の旅路、然も地獄の道筋と申しも果ぬに涙ぐみ、扱も是非なき身とは成りぬ。浮世に何も思ひ残せし事もなし、されども斯くなると知らば、大分の金子一日の間に遣ひ様のありし物を、無用の始末して是ばかり悔しや、嘸後に殘せし小判が我を恨みんと、是をのみ嘆きける。椀久



此志を感じて、それ程の大臣を世を早くせし事の情なし、色里の力落しや思ひやられける。汝定めて願へる後世もあるまじ、鬼の食になる事のあはれ、我々も佛頼むにあらず、念佛申さずむしやうといふ身なれども、茶屋風呂屋揚屋惣じての花代残る所なく濟ましければ、閻魔大王も数年の帳を見合せ給ひ、若い者には奇特なる仕舞と各々量見あつて、椀久は勤めし稱名もなし、然らば極樂に縁なし、身に悪事なければ地獄にも遣られず、律義千萬丸うまひつこきうまひつ虚なれば、是より山越えて佐伊田羅島にやるべしと、銀一挺渡されて心任せの道り取り、ゆるりと獨過ぎはすると身の上を語る時、西の空より黒雲立ち騒ぎ、火花降らして俄に車軸して鳴神響き渡り、山も崩れ川も逆浪立つて恐ろしく、魂消ゆる思ひせしに、虚空に聲して曰く、己れ未だ前生に縁深し、是より歸れと宣ひ又青天になりぬ。市太郎夢に夢覺まして喜び立ちけるを椀久引き留めて、不慮に此世に御越、其儘の蘇生、又例なき事なれば、竊に色道地獄を見せて返すべし、浮世にして末々の語り句にと云へば、如何にもく又來る事のならぬ所、概略見せ給へと嫌な所に心

を止めて、椀久に身を任せ行くは好かぬ物や。

### 三 又來る事のならぬ詠め

我れ最後より今日まで日數折れば、極月廿八日かと覺えしが、春の事ども拵へる沙汰もなく、書出しの取遣りなく、只茫然としたる住家、千草萬木四季の別ちもなく、梢の楊梅見れば水仙の花盛り、野は秋萩の亂れ、松には藤の散り懸り、茄子島に唐辛色づき、さても譯なき所ぞかし。椀久草庵と思ふ所の内に入つて、折節雨の夜の淋しさ、昔を今語り慰むより外の事なし。されば諸色の遊興、生きとせ生ける人またもなき弄びなれば、此限りは知らぬ事、我も人も見えぬ所ぞかし。某も死替てから漸々身の上人の事までを見透しける。先づ以て此正月新町の有様、それづくに賣れた顔は仕給へども、大方は身揚り宿屋の迷惑ながら、かしら三日は請合うて、他人を祭客に呼うだやうなる顔付可笑し。女鷲の身にしても詮方なきは、如何に賣物なれば逆、夜市に出して無いか、とて振られもせず、



思ひつく男のあるまで待ち賣りにするなればとけしなかりき。直段の定まりし物を推並べて下げられもせず、直切られもせず、今の八木に見合せては、少し相場を替へたき物なり。ある目賢き人の言へり、昔にかはり太夫職殊の外に見ざめして、位のないばかりにあらず、自躰の女郎びたるやうにいへり、何れさもあるべし。以前ははやるによつて天職を太夫にもなしぬ。此程は美形の女郎も稀なれば無理やりに宜しからぬ天神の御作を、下手佛師の地藏直しに太夫にすれども、顔丸く色の白さばかり當世女にして、風俗腰付歪みなりに杓子定木の類なるべし。是を思ふに今の世に良き大臣の無き故なり。仔細は譯ある男次第に、傾城は張も強く威勢もつく物を、此頃の首尾を見しに五七度もかりて、差詰めに一日も出るなれば、女郎只の勤めに隙なく、偶々初對面の客に逢へば銀拾ふたより嬉しく、ふる事も仕掛も取つて置いて先へ氣を吞まれて、酒振もお定まりの外は出来かね、何卒機嫌を取つて今日も賣りたき心入ればかり、是では面白からず、又時節も女郎も昔に替る事もあるべし。江戸も京も夫々に色遊びの末なり、暫し此道を止

め給ひ、當座切に野郎狂ひしたまへと開けたる物語聞く中、明方近くなりて、南の方には鼓の忙しく音なして、泣聲の聞へしはあれなん修羅かと尋ねければ、あれこそ惡所の恐ろしき事なれ、男色野郎の地獄とて、前生にして芝居子に遊んで諸分の悪しき大臣、後の世まで其罪を助けず、それづくに身を責められしと、椀久案内して残らず見廻りける。

#### 四 秤は情の掛そこなひ

諸色の外に野郎狂ひは戀の外ぞかし、仔細は是等に思ひつきの始め、舞臺に出て其面影の美しきのみか、藝の取廻し諸人惱みて、名をさへ山家者は知らざりしに誰に問ふともなく心を懸けしそれづくの君の紋楊枝を持つ事のやさし。是は錢一文の樂み、札錢二十四文、半疊の錢五文、煙草火繩三文、彼是錢三十三文にして一日見物して何の用捨もなく、其子が名を高聲に、ようよう命取奴、尻付殺し居れ、まそつと笑ひ居れと惡げに云ひけるも、皆恪氣心よりいふなるべし。迎も叶



はぬ銀一枚、集禮が何程入る事やら知らぬが無佛世界の人なり。只見たばかりの當座の花、罪も報ひもなかりき。又此堀に名を流し、あらましの役者も、お貌見知る程の大臣、定め茶屋より二軒目の棧敷を取らせ、毛氈色を含ませ、南に知れたる末社召連れ、冬編笠を仔細らしく被ぎ、鶺鴒色の羽織、鼠糸の長柄を見せかけ、小提開かせて吞出し、初瀬などいへる名の本を大割にして焼きかけぬれば、諸人の心是に奪はれ、此棧敷に氣を移しける。猶ほ勝つに乗つて樂屋入の役者を呼び懸け、旦那お出でと云はせ、頭を下げさせ、威光を振ひける。狂言始まり臺詞の隙に、太夫子棧敷へ目を遣ひ、顔付に戀を籠らせ銀にする思はく、外より見て羨ましく、我も又あの子を只是置かじ、銀でなる物に拵へし事なればと、一念に思ひ付くこそ因果なれ。此遊興中々端銀にして袴腰に取付かるゝ事にはあらず。一度二度にて止め難く、はや三度にも床重なりければ、遊女に各別の色増りて、何ぞ取らせたくなる事にして、脇指を作り、茶箱を送り、こんがう呼び出し二角はづみて、亭主は座敷へ出の山吹、花を散らするとて攫み出しての一步、これにました

る事あらじと御前を罷立てば、嬾入替り御機嫌を見合せ、裕時まで綿入着て、おもくれたる風俗見兼て、太鼓氣をつけて、お内儀今流行る千筋形の袷なうては叶ふまじと、又金子一兩打ちける。露もまだ干ぬに楨といふ娘の子、疱瘡輕う仕舞ふて、四五日跡に酒湯かけまして、顔美しく、敷銀なしに花髻取ると、母の親が自慢、少し姦しく耳を背けしに、是も黙られず、末社が手廣げて、旦那よりさつさうとお祝ひ、岸の堂参りの駕籠賃と二角投げければ、諸願成就愛度し、観音も同座に、亭主が弟も宵から膝立て、根太の痛むを堪忍して、無用の輕口一つも新しからず、塵の立つ疊の上に長居するは、さながら何ぞ欲しさふに見えける。此方へも些少と一角取らすれば、是ぞ福德の百年目、蒔いた種は生ゆる、大臣長久先づ懐へ納め、我等はお座の妨と勝手に引込み、其後は廻り悪き酒の相せよと呼べど空駈して出です。次第に酔の御機嫌を見繕ひ、料理人の九助まで當座島臺拵へて、大瓦盃に御紋を光らし、旦那御出世の末の松山、道頓堀に浪は越すとも、御客様の髪先長く結ぶが縁と申す物、九助が上髷の赤い鳥の鳴くまでも、い



のと御意なされましても、神八幡止める男、難波の鐵眼の鐘が限り、飲めや歌へやよいさゝつと取交せの重口、よくく一步が欲しければなり。是も聞かぬ貌もならず、萬事氣の盡きる數々、下地子の布子、下女が割りし刺身皿まで、皆大臣の迷惑となつて、何時となく銀嵩上つて、書付に一夜の夢を驚かし、取切と思へど、止めがたく亂れて、柳は綠花代は積りくつて、自ら濟まさぬ奴を、爰に捉へて、ちんどもかんともりんども云はせず、上目に懸て取る事ぞ、是を思へば色遊びも前目がよし。

### 五 銀にならざる笹の浮世

花は盛りに月は二十日餘りを詠めとや、それは律義なる古人の言葉、今時は旨き物は宵にといふ事口近し。明日の祭りは知れぬ世の中、命拙なし、日和定め難し折節は八月十五日難波の三津寺の神事なれば、毎年氏子の竈賑ひ、御燈光清く、御寶前に小相撲終夜人立ち騒ぎけるに、思はざる秋雨しきりて、あたら空を水に

なしける。南横町の飛子抱へし者の宿にして、それく四五人集まり、雨夜の物語せしを聞きけるに、惣じて大臣と見るとも、花代重ならぬ中取るべし。其仔細は如何なる人も、はや金子十兩とも積れば、今この儲け難い事を分別し、一日の端に出しかね、又新しき宿を替へ、京からつけめしの陰子呼びて、名の知れぬやうに慰む事ぞかし。銀見付し時取越して無心を申すべし、お爲に成る顔に始末してやる事なかれ、其銀のべて遣ふ物にはあらず、一夜に千兩でも有切にすべし、夢の覺ぬ内ぞといへり、それはそふなり、此銀が濟まぬとて云事にもならず、浮世かな、母親のよしなき事を餘所に見るに同じ、若衆の親方あれ程の智慧ありながら、月三割の利銀を借りるは、貧乏神が引いて廻ると見えたり。去程に色なればこそ、身に替る金銀遣ふに先が見えず、斯くいへる枕久も今こそ思ひ知られし、さりとはく爰にて人の見え透きて、悲しきとも耻しきとも云ふ方なし。あれに見えし大臣の中に、年構へなる男の眼ざし勝れて取廻し賢く、堺に隠れもなく世帯方に工夫深く、夕朝の釜の下へ生薪を焼せず、疊の縁を鞆皮なまひで仕出



し、臺確も始めて拵へ、我が才覺にて住所も求めけるに、人は知れぬものぞ、夷島へ狂言盡しの芝居罷りし時、配り札を貰ひて見初めしより、松岡九七郎といへる若女形に思ひ付き、其分には止らず、次第に板付に登りて、大阪に通ひ馴れて五年立たぬに二百三十貫目、残る物とて住吉の松の風曝淋しく、後には三枚肩をやめて歩行路に家質置いて、其銀會所より直に道頓堀に沈めける。是程まではよくも耽りける物ぞ、沙汰なしにあの願付を見て歸り給へ、死でもまだ經帷子に、其子が定紋置かせたし。今の難儀は前生にて辨別なく、外聞ばかりの仇花を出し人々に嬉がらせ、其付届けせぬによつて、悪やと思ふ一念の泪のかゝり、小笹は紫竹の柳と生じ、其根を灯心にて掘らせける。扱もどけしなき苦み見るに哀れ深し、紙が銀になるは昔の正直大臣、今の世は手にとるまでは慥ならず。嗚呼欲しや銀の成る木を千本程。空花はとらすまじきを、身代落花となつて元の空阿彌。

## 六 毛貫もあはぬ昔の顔付

常樂我淨の心になりて、親仁が溜置きし大分請取て、世間に恐るゝ人もなく、毎日遊ぶに隙のなき大臣、外より羨しく見るとは違ひ、其身になりては四條川原の水に魚の棲るが如く、何の心もなく此所を慰み宿とばかり覺えて、宮川町の奈良茶、豆腐に置き鱧、三十入の潤目鱒、當座漬の淺瓜の香の物、此分にて二角の集禮、一步を噛む様なる事といへり。伊勢の宮川にて宵朝三匁五分と定め、二の膳据るを思へば、神國は都より正直と、町から連し末社が申しき。爰の事は世上とは各別の所なり。米買ひ掛れば熊野の相場や七分の並酒は通ひ付けて一匁二分、萬事内證は斯うした事なれば、蒲鉾一切、櫃一粒仇に喰ふ事勿れ。親しく成りて壺入自慢になれば、後には嬋娟なる風情の帽子をもせず、不斷着の袖短く、三尺帯の前結び、雪隠から鼻紙忘れたといふやら、譯もなふ心安くなりて可笑しからず、兎角野郎は身拵へ清く、厩配一つぞかし。今又煩く言ふ迄もなし、知れた事なり。大臣も艶を荒して無い事云はるゝ内が花也。東山の春にもならば、八坂の塔の前に假屋を打たせ、毎日遣捨の提重百組宛調へて、軽く出たる人の爲に贈ら